

善隣

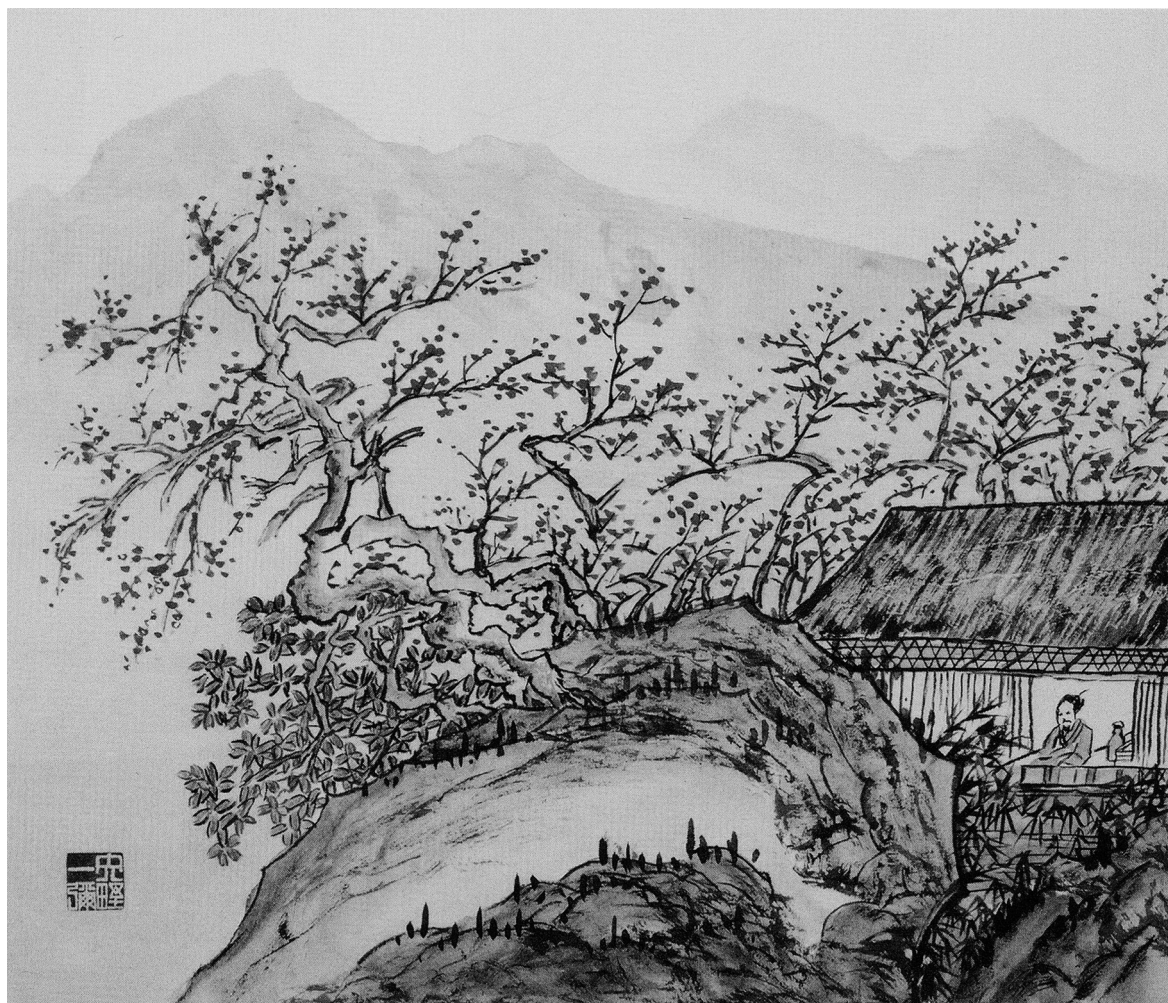
Z e n R i n

No.463 通卷730

2016年（平成28年）1月1日発行（毎月1日発行）

2016

1



一般社団法人 **国際善隣協会**

新年あけましておめでとうございます。年頭にあたり、皆様のご健康とご家族のご多幸をお祈りいたします。

昨年は1月のパリの風刺週刊誌銃撃事件から始まり、各地でのテロ事件。

戦乱の続くシリア難民のヨーロッパへの大量流入、ロシア旅客機の撃墜、そしてパリでの同時多発テロと世界は混乱の中にあります。これで終わるかと思えば、トルコ軍機によるロシア軍機の撃墜により、両国は

新年のご挨拶

一触即発の緊張状態にあります。我が国を取り巻く状況も中国の海洋進出による南シナ海での緊張、韓国との歴史認識問題など憂慮すべき課題が山積です。

世界はグローバリズムによる各国の共存・共栄を目指していたはずですが、今は国民国家を前面に出したエゴのぶつかり合いです。当協会が目途としている近隣諸国との善隣・友好とは相いれない状況にあります。

国内では若干の混乱がありました、安全保障関連法が成立し政治のテーマはTPP、軽減税率など経済問題に移っています。安倍首相は「新三本の矢」

を打ち出し、消費の拡大に躍起ですが笛吹けど踊らずで、なかなか景気の低迷から抜け出せないのが現状ではないでしょうか。

さて、協会活動でございますが、昨年の耐震補強工事に続き会館の価値を維持するため、南壁面の補修工事を手掛け、地下配電盤については年度内に整備が完了する予定です。この財源には昨年来準備をしておりました国際善

会員の皆様へ

会長 矢野 一 彌



の主要事業と位置付け、これも執行部全員が参加し交流範囲を中国から東アジア諸国へと広げ、拡充をはたします。

新年度の目標といたしましては、昨年から継続しております『20年記念事業』として、『挑戦する満洲研究』を出版、引き続き『協会100年史』を編纂中でございます。そして今年度は引き揚げ開始20年に当たり、記念の講演会などを企画しております。20年前と違い、体

験者も少なくなり最後の行事となるかもしれませんが、皆様のご協力をお願いいたします。

さて、協会財政はテナントもほぼ満室の状態にあり、安定しております。しかし、テナント収入をこれ以上積み上げることは難しく、新規の収入源を生み出す必要があります。理事をはじめ会員各位には新規事業の提案、そして経費の節減策を広く求めている状況でございます。

このように、課題は山積しておりますが、執行部一同適切な対応を図りたいと思います。皆様の絶大なるご支援を賜りたくお願いいたします。

善 隣 目 次

2016年 1 月号

新年のご挨拶

会員の皆様へ矢野一彌 表紙裏

公開講演会記録

新常态下の中国金融・資本市場.....関根栄一 2

日本の^{えつこ}鉞子、世界の鉞子内田義雄 10

李香蘭と上海、香港.....高橋政陽 18

中国ウォッチング編・訳 上松玲子 26

協会活動報告

山東理工大学農業工程学院訪日記村田嘉明 30

陶々俳壇馬場由紀子選／鈴木昭治郎 31

協会通信・会員だより・同好会だより・編集後記..... 32

2016年 1 月の行事予定..... 33

善 隣 第463号 通巻730号

2016 (平成28) 年 1 月 1 日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋 1-5-5

一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03 (3573) 3051

FAX 03 (3573) 1783

発行人 矢野一彌

印刷所 (旬)ゆにおんプレス

定価 (送料共) 一部300円 年額3,600円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

表 紙

矢野一彌「春暁」

新常态下の中国金融・資本市場

野村資本市場研究所 関根栄一



新常态（ニューノーマル）下の 実体経済

中国経済が新常态に入ってから久しい。「新常态」とは「ニューノーマル」を示す中国経済を見る上でのキーワードである。ニューノーマルは、経済成長の目標成長率の引き下げを示すシグナルでもあり、従来の輸出・投資主導から内需・サービス主導に向けた成長モデルに転換していく中で、段階的に成長率が鈍化していくプロセスをも指している。

習近平国家主席がニューノーマルを初めて使ったのが2014年5月の河南省視察時で、以降、中国の実質GDP成長率は、2014年4～6月期が7・4%、

7～9月期が7・2%、10～12月期も7・2%、2015年1～3月期が7・0%、4～6月期も7・0%、7～9月期が6・9%と徐々に鈍化している。

GDPは、投資、消費、純輸出から構成されるが、成長率の鈍化の背景には、まずは投資の伸び率の鈍化が指摘できる。中国の投資を表す指標は固定資産投資であり、投資全体において前年同期比の累計伸び率は2015年1～10月で10・2%と、毎月鈍化が続いている。中でも不動産投資の伸び率は2%と、同じ投資の中でも鈍化が際立っている。貿易動向では、中国の2015年1～10月の累計のドル建て輸出は前年同期比で2・5%減、同じく輸入は15・7%減となっている。うち、2015年10月単月のドル建て輸出

は前年同月比で6・9%減と4か月連続の前年割れ、同じく輸入は18・8%減と12か月連続の前年割れが続いている。

また、内需のうち、製造業については、国家統計局と中国物流購入連合会が共同で発表している製造業購買担当者景気指数（PMI）も、8月から景気判断の分かれ目となる50を3か月連続で下回っている。国有企業の総利益については、2008年9月のリーマン・ショック直後に政府が実施した4兆元の景気対策の効果が剥落して以降、長らく低迷している。2015年1～10月の国有企業全体の総利益の伸び率は前年同期比でマイナス9・8%、うち中央企業がマイナス11・3%、地方企業が同マイナス6%と、鈍化が続いている。これらは、過剰投資と

過剰生産の問題に結びついており、裏側には過剰債務が存在している。リーマン・ショック後の景気対策を機に国有企業の財務レバレッジは過度に拡大しており、潜在的な不良債権と見ている。

堅調な消費が中国経済を下支え

一方、消費については、習近平指導部により打ち出された反腐敗運動の影響で、2013年以降、官官接待や、民による官の接待が難しくなり、前年同月比の消費の伸び率のうち、飲食業は2012年12月の15・1%から、2013年4月には7・9%と一気に半分以上下落した。飲食業の落ち込みが消費全体の伸び率への下押し圧力となっていたが、2014年8月の8・4%を底に上昇し始め、2015年3月からは消費全体の伸び率を上回っている。飲食業が牽引する形で、消費全体の伸び率も、2015年4月の10%を底に回復基調にある。

中国の消費金額は、2014年通年で27兆1896億元と、1元≒20円として円換算すると約540兆円で、日本のGDP並みの規模となっている。

2015年1～10月は24兆4359億元で、通年では28兆元を超える見込みで

ある。近年では、ネットショッピングの急速な普及も消費の特徴である。ネットショッピング金額は、2005年の160億元から、2014年には2兆7900億元に増加し、消費金額全体に占める割合も同じく0・23%から10・26%に拡大している。2015年で7年目を迎える11月11日の「独身の日」のネット通販商戦では、中国の電子商取引最大手アリババグループの当日の売上高は約912億元（約1・8兆円、前年比約6割増）に達した。また、消費のパターンも、沿海の都市部を中心に、単なる「モノ消費」から、イベント型の「コト消費」に移りつつあり、旅行もブームとなっている。対日観光も、コト消費の流れの中にある。

国家統計局が2015年6月3日に発表したデータによると、2014年の最終消費、資本形成、純輸出のGDP成長率への寄与率はそれぞれ50・2%、48・5%、1・3%で、GDP成長率を3・7ポイント、3・6ポイント、0・1ポイント引き上げており、消費の牽引力は明らかである。また、2014年の中国GDPの産業別内訳は、第1次産業が9・2%、第2次産業が42・7%、第3次産業が48・1%と、中国経済のサービス化が進んでいる様子も窺える。

GDP統計については、内外から精度についての疑義が上がっているが、投資については過剰投資のもとで過大に計上されている恐れがある半面、消費については統計で捕捉しきれていない部分もあると思われる、過小評価されている可能性がある。

問題は、中国経済の成長モデルの転換が進む中で、次第に統計間の整合性が取れなくなってきた点にもある。典型的な例として、第2次産業や重厚長大産業が牽引してきた遼寧省をモデルにした李克強指数（銀行融資、電力消費量、鉄道貨物輸送量）がある。市場関係者が多用してきた同指数では、今や中国経済の変化を捉えられなくなってきた。

株式市場改革は「改革の本丸」

中国株式市場の課題のうち、発行市場では、企業が成長度合いに応じて上場先を変える「指定替え」ができないなど資金調達上の制約が大きく、新規株式公開（Initial Public Offering、略称IPO）や増資でも実現までに時間がかかりすぎるといった問題が挙げられる。一方で、2013年秋の中国共産党第18期中央委員会第3回全体会議（第18期3中全会）で採択された改革プランでは、株式市場も

改革の本丸に位置づけられ、企業が成長段階に応じて資金を調達でき、多様な投資家の参加が見込めるような市場に育成すべく変革が進められようとしている。

発行市場では、多様な株式市場を構築することが政策の目標となっている。企業数から見たピラミッドの頂点から見ると、日本の東証1部に相当する「主板」(メインボード)を筆頭に、東証2部に相当する「中小企業板」、東証マザーズのように新興企業を対象とした「創業板(二板)」、新規の株式登録・公開を扱うジャスダックに似た「新三板」が公開市場として存在する。新三板は、北京に本部がある全国中小企業株式譲渡システム有限責任会社が運営している。このほか非公開市場としては地方のエキイティ市場として「四板」が整備されている。

これまで、中国の株式市場のうち、大企業は上海証券取引所、中小企業や新興企業は深圳証券取引所で上場するという棲み分けができていたが、企業の新陳代謝を促進するため、上海証券取引所としても新興企業向け市場として「戦略新興産業板」の開設計画を進めている。現在、中国证券监督管理委员会(証監会)に開設を申請中である。また、企業がIPOないし増資を行う場合、これまでは

中央の証監会が審査・認可に当たっていたが、銀行融資ではなく、市場からの資金調達を円滑かつ速やかに進めるため、「株式発行登録制度」を導入し、今後は各証券取引所に審査権限を委譲する計画もある。そのためには「証券法」を改正する必要がある。当初は2015年内の改正作業の完了を目指していたが、2015年6月以降の株式市場の動揺を受け、全人代での審議が遅れ、改正・実施時期は2016年に延期されることが確実な情勢となっている。(後述)

制度改革は今後の課題として、実態上、新興企業の登録数は飛躍的に向上している。2013年末から2014年末にかけて、新三板の登録企業数は356社から1572社へ、四板は6538社から1万4952社へとそれぞれ急増している。新三板の登録企業数の増加は2015年も続いており、同年10月末時点では3896社に達している。このように新三板や四板に登録する将来のIPO予備軍が増加した背景には、企業の新陳代謝を促す政策がある。例えば、「会社法」が改正され、最低資本金制度の撤廃や資本金払込スケジュールに関する規制緩和が実施されている。

株式発行登録制度改革後、旺盛なIPO

Oを支える資金として、個人金融資産の存在が指摘できる。筆者の試算によれば、2014年の個人金融資産の純増加額は約14兆円で、円換算すると280兆円規模の増大となる。個人金融資産残高についても2014年末時点で約93兆円、円換算では1860兆円となり、既に日本の個人金融資産1700兆円を超える規模となっている。ただし、中国の個人金融資産の内訳を見ると67割が現預金で、これが銀行部門に対する貸出圧力として働き、不採算部門を延命させる結果となっている。貯蓄を投資に転化することは、リスクマネーを新興産業に供給し、経済成長のモデル転換を促す上でも重要である。

グローバル市場に影響した株価暴落

過去10年間の上海総合指数を見ると、二度の下落局面があった(図1)。最初はリーマン・ショックの1年前で、2007年10月の6000ポイント強をピークに1年後には2000ポイントを割り込む水準にまで下落した。その後は2014年まで2000〜3000ポイントを挟んだ展開となっていたが、2014年11月に中国人民銀行が利下げに踏み

切ったのを機に、株価は反転し始めた。9月上旬のG20財務相・中央銀行総裁会議で中国人民銀行・周小川総裁が述べたように、2015年6月以降、株価に計3回の大幅な調整が発生した。第1回目が6月12日で、上海総合指数が516



6・35ポイントと2008年1月以来7年5か月ぶりに高値をつけた後で、その後、急落した。第2回目が7月27日で、上海総合指数は3725・56と先週末の終値と比べて8・48%下落し、1日の下げ幅としては2007年2月以来の大幅な値下がりとなった。第3回目が8月24日で、上海総合指数は3209・91と先週末の終値と比べて8・49%下落し、7月27日の1日の下げ幅を再度更新した。この第3回目の急落の翌日の8月25日、中国人民銀行は、2014年11月以来、計5回目の利下げを行った。この利下げは、国内の実体経済を回復させるためというより、中国で起きた株価の急落がグローバルな株式市場に波及するのを防ぐためだったと理解できる。

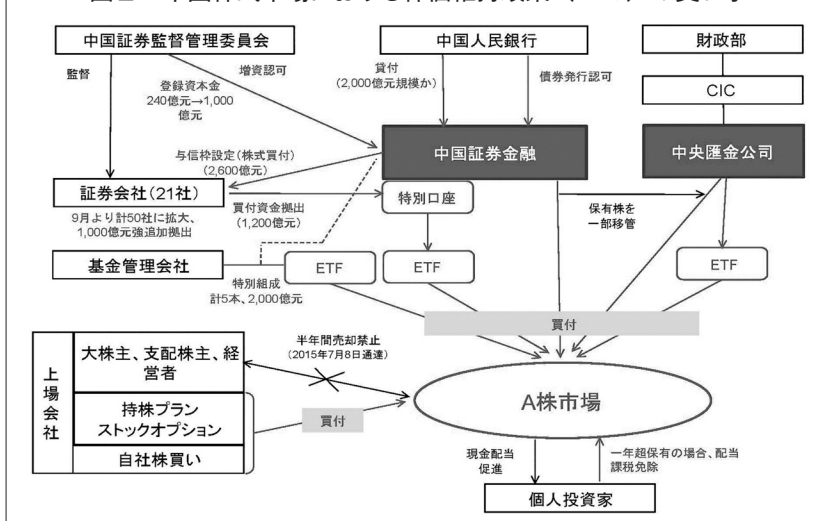
上海A株の時価総額は、2015年6月12日にピークの約41兆元をつけて以来、一時3分の2の水準まで落ち込んだ。ただし7月8日に本格的に始まった株価維持政策 (Price Keeping Operation 略称PKO) や利下げの効果もあり、時価総額および売買水準は国慶節明けから持ち直し、株価についても7月の水準を回復する3600ポイント台まで戻っている。株価の割高・割安の目安となる株価収益率 (PER) の水準も、6月12日に

記録したピークの24・9倍から11月は18倍前後にまで低下し、小康状態を保っている。

PKOの功罪

中国当局によるPKOへの評価については、単に目先の株価を操作したというだけでなく、株式市場の問題が金融市場に転化し、金融システムリスクが顕在化しないよう、手を尽くした結果とも捉えている (図2)。「国家チーム (国家隊)」と呼ばれる中国のPKOを担う政府系ファンドは、1つが国有独資の投資会社である「中央滙金投資有限責任公司」、もう1つは日本証券金融株式会社と相当する「中国証券金融株式会社」である。今回、中国証券金融から証券会社21社に対し、総額2600億元に上る与信枠が設定され、証券会社の資金繰り緩和および上場投資信託 (FTF) 経由での株価維持に利用された。同時期に中国人民銀行のバランスシート上では「その他金融機関」向け貸し付けが約2000億元増加しており、特定はできないものの、大半が中国証券金融向けで、実質的には同社を介して当局から資金が供給されたと考えられている。一時

図2 中国株式市場における株価維持政策（PKO）の買い手



期、2800銘柄のうち、1400銘柄が売買停止となったことで、証券会社の短期の資金調達が困難になるなか、中国证券金融からの大規模融資は証券会社の資金繰りを助ける効果があった。ただし、中国证券金融を通じた買い付けおよ

びファイナンスはあくまで有事の対応で、中国国内には、もし当局が株式市場に介入するのであれば、1997年のアジア通貨危機の際に香港で生まれたトラッカー・ファンドのようなものを作り、ルールと出口を明確にした上で関与すべきではないかとの議論もある。こうした議論も、証券法の改正の遅れの原因となっているようである。

株価暴落の局面では、証監会は、個人投資家に対して信用取引における契約の更新回数を2回から無制限に延期したほか、追い証（追加担保の差し入れ義務）も機械的に求めないなど、規定改正を即座に実施した。信用取引の約9割は借り入れにより賄われていたため、仮に規定改正がなければ、個人投資家が返済不能に陥るケースが多発し、証券会社のバランスシートも毀損していた可能性が高い。中国人民銀行の周小川総裁、李克強総理、そして習近平国家主席も、9月以降の国際会議の場で、「金融システムリスクだけは起こさない」と揃って発言しており、並々ならぬ決意の表れと受け止めることができる。中国人民銀行にはまだ、資金供給余力があるものの、中国市場においてはシステムリスクに

留意する必要がある。

このほか、個人投資家が株を1年以上保有する場合には、配当課税を免除することで株式保有のインセンティブを高めた。また、企業に対しては、自社株買いを推奨して市場での買い付けを促した。

一方で、2015年7月8日には売却禁止の措置も講じており、自社株を5%以上保有している大株主等に対し向こう半年間の売却制限（ロックアップ）を実施している。この結果、発行済み株式総数のうち、少なくとも5〜10%が塩漬けとなり、市場で売買されないことで間接的に株価が維持された側面もある。7月のロックアップは年明けには解除されるため、再び売り圧力が高まることが予想される。PKOの出口局面についても留意する必要がある。

流通市場では多様な投資家層の育成が課題

信用取引の売買金額は6月まで高水準で推移していたが、上海A株の売買総額に対する比率で見ると、今年1〜2月にはすでにピークを迎えていた。中国の信用取引のうち、95%が借入による信用買いであることを考えると、レバレッジの高い

投資は、1～2月を境に「売り」に転じたことを意味しており、賢明な投資家は株価暴落前の2015年の春先には取引を手仕舞っていたと筆者は見ている。

2015年の春先以降の株価上昇には要因が2つある。1つは個人投資家の利便性を高める狙いで4月13日から一口座の制限が撤廃されたことである。これにより、A株の新規口座開設数が爆発的な伸びを示した。中国の株式市場のうち、上海証券取引所では、個人投資家の売買比率が82%（2013年）を占めるなど、以前から個人投資家に偏重した投資家構成となっていたが、今回の規制緩和を受け、個人投資家によるA株の新規口座開設数は3月の約486万口座から4月には約1300万口座に急増した。

春先の株価上昇のうち1つの要因は、中国の人民日報が4月下旬に「上海総合指数の4000ポイント到達は新たな買い相場の始まりである」という社説を掲載したことである。「一带一路（新シルクロード）構想」の下で、人民元の国際化が進むと、人民元サービスを提供する銀行に新たなビジネスチャンスが生まれる。この結果、上海市場の優良企業である銀行は業績が向上し、株式市場は今後も有望というのが人民日報の狙いだった

ようである。

しかし、賢明な投資家は年明けには信用取引を縮小していたと見られるなかで、口座数の規制緩和や人民日報の不用意な社説により、80～90年代生まれの若い個人投資家が新たに株式市場に参入し、買いが買いを呼ぶサイクルに入ってしまった。結果として、当局が株式投資ブームを主導したことになる。

外国人投資家の株式保有比率は、2015年8月末で1・25%にとどまっている。一方、日本の同比率は2015年3月末時点で31・7%と、2年連続で3割を超えている。中国で外国人投資家が株式市場で売買するにはQFII（適格外国人機関投資家）、人民元建てであればRQFII（人民元建て適格外国人投資家）のライセンスと運用枠を取得する必要がある。

今後、外国人投資家を株式市場に呼び込むためには2つの条件が考えられる。1つは水際での資本流入規制の緩和である。例えば、QFIIを認可制から登録制に緩和し、投資の運用枠も撤廃するよう自由化である。2015年10月の中国共産党第18期中央委員会第5回全体会議（第18期5中全会）で採択された第13次5か年計画の建議では、人民元建て資

本項目の自由交換性を段階的に実現し、資本市場の双方向の開放を推進する中で、対内・対外投資の運用枠規制を改革し、段階的に取り消すとしている。対内証券投資については、現行の「運用枠」という考え方が将来的にはなくなり、資本の流出入が容易になる可能性がある。もう1つは中国の上場会社に対する投資規制の緩和である。現在、中国への直接投資や証券投資に対しては、国家発展改革委員会と商務部が定める「外商投資産業指導目録」に基づき、投資分野を奨励・制限・許可の3類型に分け、具体的投資分野を列挙して管理し、併せて各分野への外資の進出条件（出資比率、ライセンス内容）を定めている。いわゆるポジティブリスト方式である。これに対し、第13次5か年計画の建議では、参入前の内国民待遇とネガティブリスト管理制度を全面実行するとしている。ネガティブリスト方式の下では、投資分野に原則制限を設けず、制限は例外扱いとして管理されるため、直接投資にせよ証券投資にせよ、外資の投資分野が拡大し、より投資しやすい環境が構築されていく可能性はある。第18期5中全会に先立つ

10月19日、国務院は「市場参入ネガティブリスト制度の実施に関する意見」を公

表し、中国全体でのネガティブリスト方式の適用に向け、2015年12月1日から2017年12月31日まで一部地域で試し、2018年より全国で実施するとしている。ネガティブリスト方式の採用に当たり、このように実施時期を区切り、改革を後戻りできないようにしているのも特徴である。

IPO再開は金融仲介機能の歪みを是正する上でも重要。中国では、2015年6月以降、IPOが止まっており、今後この状況が続くようであれば、金融仲介機能に歪みが生じることが懸念される。中国人民銀行は、「実体経済が金融システムから調達する資金総額（フロー）」を「社会融資規模」と定義し、人民元貸付、外貨貸付、委託貸付、信託貸付、銀行引受手形、社債、非金融機関国内発行株式に分けて、2002年から統計を発表している。

社会融資規模のうち、筆者にて、人民元貸付・外貨貸付を「銀行融資」、委託貸付・信託貸付・銀行引受手形を「オフバランス融資」、社債・非金融機関国内株式発行を「直接金融」とそれぞれ独自分類して計算すると、社会融資規模に占める銀行融資の割合は、2002年の95・5%から徐々に低下し始め、オフ balan

ス融資が拡大した2013年には54・6%と、社会融資規模の半分近くまで低下した。これは、実体経済の「銀行離れ」を示しているものである。銀行融資の社会融資規模に占める割合は、2014年が61・6%、2015年（1～9月）が73・8%と回復してきているように見えるが、これは、シャドーバンキングに対する金融当局の規制の結果、オフバランス融資が絞り込まれているからであり、実体経済の「銀行離れ」の傾向が是正されているためではない。むしろ、銀行の融資難に直面する中小企業や民間企業は、先進国でも広まっているソーシヤルレンディングの活用に着目出しているのが実態である。銀行借入れにアクセスできない企業は、地下金融に向かってしまう可能性もある。

中小企業や民間企業の中でも、将来性のある新興企業に株式市場の機能を活用できるようにさせることは、金融仲介機能を正常に戻すための必須条件であり、もしできないければ、別のリスクを市場に蓄積させることとなる。2015年11月6日、証監会は、IPOの再開を公表し、既に認可済の28社のうち、10社を先行して上場させるとしている。IPO予備軍の出口戦略を加速する必要がある。

人民元切り下げは国際化の一環

「国際金融のトリレンマ」とは、「独立した金融政策」「固定相場制」「自由な資本移動」の3つの政策を同時に実現することはできないという概念である。中国の将来の姿として、金融政策の独立性は必要である。さらに経済がグローバル化するなかで自由な資本移動も不可欠であると考え、固定相場制を維持し続けるのは難しく、フロート制に向けた為替レートの柔軟化に着手していかざるを得ないと考えられる。こうした背景から、株価暴落と同時期に実施されたのが人民元の基準値の切り下げで、対ドルレートの切り下げ幅は8月11日からの3日間累計で4・5%に及んだ。貿易動向、特に輸出動向の悪化により、7月下旬に元安誘導が予想させる政策が当局から出ていたことや、折からの株式市場への当局の干渉により、内外の市場参加者は、人民元の強引な切り下げで支えなければならぬほど実体経済は良くないと、警戒するようになった。

ところが、中国人民銀行は人民元の国際化を念頭に、人民元レートについては市場実勢に合うよう調整していくという

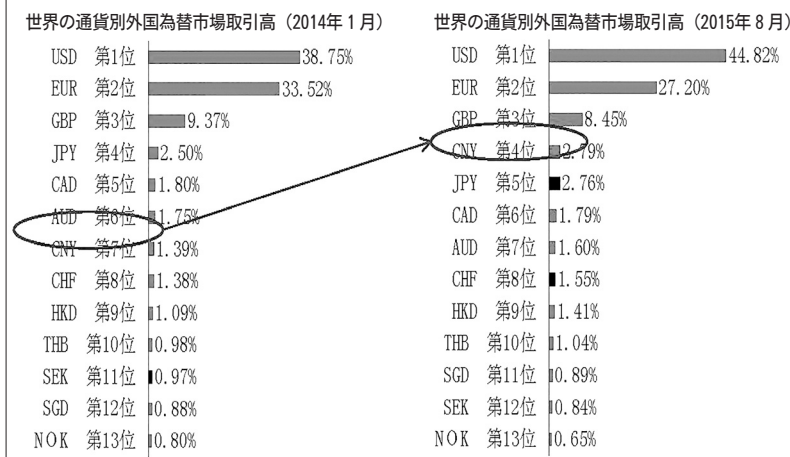
自由化・市場化に向けたスタンスを崩しておらず、実体経済の浮揚を狙った切り下げとの認識は、同行の市場とのコミュニケーション政策の不足によって生まれた誤解と思われる。中国人民銀行を含む中国当局には、外国人投資家を含めたマーケットの理解が得られるよう、市場との対話を工夫していく余地がある。

人民元の国際化については、中国人民銀行が中心となって、RQFIIのほか人民元のクリアリング銀行、直接交換取引、人民元建て債券などの「仕掛け」を用意し、主要国と個別に交渉した上で二国間金融協力の枠組みについて合意するというやり方を推し進めてきている。一方、東京市場には人民元のクリアリング銀行もRQFIIも設定されておらず、欧州先進国のみならず新興国にも劣後してしまっている。10月8日からは、日銀の外為円決済システムに相当する人民元の国際決済システム(CIPS)が稼働しており、各市場に人民元のクリアリング銀行がなくても、海外銀行が現地法人を通じて中国人民銀行のシステムに直接参加し、国際的な取引決済を実行することが可能になっている。しかし、邦銀は残念ながら対象リストから漏れている。日中関係の影響が二国間の金融協力にも

影を落としていると言えよう。

人民元の国際的な為替取引量は2015年8月、世界第4位、市場シェア2・79%となり、日本円の市場シェア(2・79%、世界第5位)を初めて逆転した(図3)。その後、同年9月には、人民元が再び世界第5位に後退したものの、中

図3 中国の外国為替市場取引高における人民元の存在感



国のGDPが世界全体の13%を占めていることを考えると、貿易、直接投資、証券取引を通じて人民元の利用はさらに加速していくと思われる。すぐに国際的な取引量が増えるわけではないが、国際通貨基金(IMF)の特別引出権(Special Drawing Right、略称SDR)構成通貨に人民元が採用されることは、人民元が国際的な主要通貨として認知されたことを意味する。今後、国際通貨化する人民元を東京市場にどのように取り込んでいくかも問われている。

(2015年10月15日・アジア研究懇話会)

講師略歴(せきね えいいち)

1969年生まれ。早稲田大学法学部卒業、北京大学終了。2002年早大社会科学研究所修士課程修了。

1991年日本輸出入銀行(現国際協力銀行)入行。北京大学研修(漢語センター)北京駐在員事務所棟を経て、2006年5月野村資本市場研究所入社。2010年より現職。

著書『中国証券市場大全』(共著、日本経済新聞出版社)、『激流アジアマネー 新興金融市場の発展と課題』(共著、日本経済新聞出版社2015年)など

日本の鉞子、えっこ世界の鉞子

元NHKエグゼクティブ・プロデューサー 内田義雄



奇跡のベストセラー

1925年（大正14年）末、ニューヨークで出版された杉本鉞子（英語名…エッ・イナガキ・スギモト）著「*Daughter of the Samurai*」（日本語版題名『武士の娘』）は、ニューヨーク・タイムズ紙をはじめ各紙で絶賛され、ベストセラーになった。当時アメリカでベストセラーになった本は、フィッツジェラルドの『華麗なるギャツビー』やヘミングウェイの『陽はまた昇る』などだったことを考えると大変な偉業といえる。その後この本は、フランス、イギリスなどヨーロッパ7か国で翻訳され出版された。日本語版が発刊されたのはかなりお

そく、1943年（昭和18年）のことである。先日、NHKが戦後70年企画のひとつとしてBSスペシャルでとりあげた際、『武士の娘』を「奇跡のベストセラー」とよんだのはこうした事実にもとづいている。（私の本が原案になったNHKの番組のタイトルは「武士の娘 鉞子とフローレンス―奇跡のベストセラーを生んだ日米の絆―」）

私が杉本鉞子の『武士の娘』に興味をもったとき、大きく2つの問題意識があった。

1つは、なぜ当時アメリカでそれほど賞賛されベストセラーになったか、ということである。彼女は越後長岡という片田舎で生まれ育った半生記を書いただけなのに、読んだアメリカ人がなぜ感動したのだ

ろうか。それは彼女が世界共通の価値観というものを語っていたからではないかと思う。これはすばらしい、日本にもそういう考え方や伝統があるのかと、日本人を見直したのではないかと思う。

もう1つは当時の歴史的状況である。トーマス・ハクスリーというイギリスの生物学者がいる。作家オルダス・ハクスリーの祖父にあたる人である。ダーウィンの進化論を非常に評価した人物で、その彼がこういうことを言っている。「自分が好きなことをできるようになったときこそ、人間にとって最悪の困難が始まるものなのだ」と（W・リップマン「道徳論序説」より）。それは単に人生の問題だけではなくて、政治でも社会でも歴史でも、そうなのだと思う。何でも



晩年の杉本鉞子

きるのだと思ったときこそ、謙虚にならなくてはいけない、抑制しなくてはならない。杉本鉞子の『武士の娘』はそれを語っていたのである。だから読んだ人たちは感動した。それは1920年代のことだったが、こんにち日本はどうなっているのかと不安を感じている人は多いと思う。時代的狀況は今日に似ているのではないかと思う。

生まれ故郷…越後長岡

『武士の娘』の冒頭に書いてあるように、杉本（旧姓稲垣）鉞子は日本海側の雪国に生まれている。越後平野の中央部にある長岡である。米どころであり、信

濃川と新潟の湊を控えた水上交通の要衝だった。

長岡城は越後平野の平潟につくられた平城で、今は何も残っていないが、たいへん美しかったという。信長や秀吉によって弾圧・誅殺された一向宗（浄土真宗）の信徒たちが、理想郷として設計したものだともいわれる。

長岡藩は7万4千石。家康に仕えた三河の牧野家が城主となった。親藩である。

鉞子の父は長岡藩筆頭家老の稲垣平助で、稲垣家も家康に仕えた武将で2千石、藩主の教育係でもあった。

幕末になると、藩の路線をめぐって稲垣平助は、藩主及び拔擢された河井継之助と対立する。稲垣平助は勤皇派で、將軍慶喜が朝廷に恭順・謹慎を受け入れてしまった以上、長岡藩も朝廷側に恭順すべし、と唱えた。しかし、あくまでも徳川家への忠誠を唱える藩主牧野家と家老・軍事総督の河井継之助は、朝廷軍との対決を主張。稲垣平助を罷免する。

こうして長岡藩は奥羽列藩同盟に加入し戊辰戦争へ突入する。朝廷軍は洪水で氾濫する信濃川を渡り、長岡城を攻撃。平城は半日で落城し、長岡の町の8割は焦土と化した。

鉞子の生い立ちと婚約

鉞子は、稲垣家の六女として明治5年（1872年）に生まれた。「鉞」は「まさかり」と読めても「えつ」と読める人は少ないであろう。稲垣家では長男のあと娘が5人も続き、6女はせめて男のように強い子にしたいと「鉞」と名付けたという。鉞子は男の子のような教育を受け、意思の強い子に育てられたようだ。

明治維新になって、恭順派だった稲垣平助は一時的に重用されるが、平助自身はそれをいさぎよしとせず、下野し「武士の商法」に挑戦する。しかしことごとくうまくいかなかった。

そのうち「主君のために命を捧げた」河井継之助にこそ見習うべし、という時代になり、主君に抵抗した稲垣平助は「腰抜け」「裏切り者」とされ、それ以来稲垣家の子孫は故郷では肩身の狭い思いをしてきたといわれる。

『武士の娘』には戊辰戦争で苦悩する父稲垣平助のことが、想い出すかのように随所に出てくる。鉞子は父が立派な武士であったことを誇りにしていたし、父の無念をよくわかっていて、しかし鉞子は、恨んだり、悔やんだり、怒ったりす

るようなことは一切書いていない。この我慢強さ、忍耐力、自制心は驚くばかりである。

家族で一番運命が変わったのは、鉦子の兄で長男の平十郎だった。明治になって、央（なかば）と名前を改める。

福沢諭吉の慶応義塾に入学するが、勉強をせず、退学して長岡へ戻る。そのうち家出して上京し、当時下士官を養成する「陸軍教導団」に入隊した。

央は教導団砲兵科を卒業して、東京鎮台砲兵伍長になるが、いつまでも「下士官」どまりであることを思い知らされ退役し、一旗あげようとアメリカへ渡ることが、それもうまくいかず、帰国する。生涯まともな職業に就けず、「人生の落伍者」（央の息子稲垣重政の証言）となっていた。

しかし、央がアメリカへ出稼ぎに行き、サンフランシスコで一文無しになって路頭に迷ったとき、助けてくれた人がいた。鉦子の未来の夫となる杉本松雄（本名・松之助）である。鉦子は兄の幹旋で松雄と婚約する。親戚一同の合意をえて母、金が鉦子に嫁ぎ先を告げる。当時の日本では女性はやがて決めたところに嫁ぐのが普通だったので、それを受け入

れた。婚約した時、杉本松雄は25歳、鉦子はまだ14歳だった。

杉本松雄は、文久2年（1862年）京都郊外の「草津の湊」で魚問屋を営む杉本庄太郎の2男として生まれた。4歳のとき父が亡くなり、母の手で育てられた。15歳のとき家出し、苦労の末、明治15年横浜から渡米したという。1896年にサンフランシスコからシンシナティへ移り、街の中心街で日本の工芸品や雑貨を扱う店「ニッポン」を開いていた。

故郷の教師・大道長安

鉦子の考え方に大きな影響を与えたのは、稲垣家の菩提寺である長興寺（曹洞



杉本松雄・鉦子・花野・千代野
（シンシナティ、1905年頃）（鉦子アルバム）

宗）の住職・大道長安師だった。この人を父が鉦子の師匠に選ぶ。こうして鉦子は6歳にして四書を学んだ。講義の内容は鉦子にはまったく理解できなかったが、師匠はきまって「百読おのずからその意を解す」と答えた。まさしくその通りだった、と鉦子を書いている。のちになって次第に、暗誦していた四書の大切な句の意味がのみこめるようになったからである。（ルース・ベネディクトは、日本の国民性を分析した著名な書『菊と刀』のなかで、『武士の娘』の文章を少なくとも6か所引用している）

長安のちにキリスト教の教えをとり入れた「救世教」を唱え、仏教会から破門された。鉦子は『武士の娘』（第6章「お正月」）のなかで、「このお方は、真実のためには、赤貧をも嘲笑をもいとわず、清契の群にくみしておられたのだと知りました」と書いている。

「清契」という漢字は、諸橋轍次『大漢和辞典』によれば、「清らかなちぎり」「清い交わり」の意味である。漢学の素養があった鉦子が大岩美代の翻訳を手伝わなかったら、こんな訳は生まれなかっただろう。

興味深いのは、この『清契の群』の英文は『the Army of the Few』即

ち「少数者の集団」、少数意見や異議を申し立てる人たちの意味である。信念のためには、赤貧も嘲笑もいとわない、「異端」「異教」といわれてもかまわない、信ずる我が道をいくだけである。そういう人々をさしている。これこそ「民主主義の精神」(the Spirit of Democracy)だと鉞子は書いているのである。しかし戦時中に出版された『武士の娘』日本語版(大岩美代訳)では、敵国アメリカの国是である「デモクラシー」をそのまま訳すわけにゆかなかったので、「四海同胞の精神」と訳されている。

民主主義というと、「なんでも多数決」と思っている人が多いが、多数決の決着というのは、意見をたたかわして、どうしても決めなければならぬときの手続きにすぎず、実は、そのプロセスが大事なのである。民主主義の本質はなにかといえば、少数意見や異議申し立てを尊重することにある。民主主義の「個人の尊重」とはそういうことであろう。

鉞子は、長安のエピソードのなかで民主主義の本質をさりげなく語り、そうした生き方をした大道長安師を生涯尊敬していた。鉞子がアメリカで「デモクラシーとはなにか」を体得していたことがよくわかるのである。

海岸女学校

鉞子はアメリカへ嫁ぐため英語を学ぶべく東京の「海岸女学校」に5年間かよった。女学校は、アメリカのプロテスタント(メソジスト監督教会)の婦人伝道会が、明治10年築地鉄砲洲の外国人居留地に設立したミッションスクールであった。のちの青山女学院、今日の青山学院大学の前身である。明治になって日本へやってきた宣教師たちの多くは、まだ20代から30代の女性たちで、若々しく使命感にあふれていた。

鉞子によれば、女学校で学んだことは、開放感、表情の豊かさ、質問することの大切さ、ユーモア、民主的な規則(democratic rules)を学ぶこと(大岩訳では「学校内の平民的な規則」と訳されている)、そして聖書の教えなどであった。

鉞子は女学校で異質文化を知り、在学中にキリスト教の洗礼を受けている。これは鉞子の人生のなかで最も重要な転機の一つである。

鉞子は渡米前、伝道会から支給された奨学金を返済するために浅草で5年間、伝道会が経営する小学校の教師を務め

た。浅草の5年間は並大抵の苦労ではなかったであろう。婦人伝道会の年次報告書が残っているが、「稲垣鉞子は子ども達の心をつかみ皆から愛されている」と報告されている。

オハイオ州シンシナティ

明治31年(1898年)春、鉞子は渡米する。婚約してから12年、鉞子は26歳になろうとしていた。

19世紀末、鉞子が渡ったアメリカ社会は大きな変化をとげようとしていた。

1861年に始まった南北戦争で両軍をあわせて62万人もの兵士が死亡し、ジョージア州など南部諸州は未曾有の荒廃に陥った。その後、南部の再建や西部の開拓が飛躍的に進むと、大陸横断鉄道、鉄鋼業、石油の発見と開発、金融業の発達など、アメリカ的資本主義が急速に発展する。社会全体で異常な物欲主義や金権政治が横行し、『トム・ソーヤーの冒険』の作家マーク・トウェインは、この時代を「金メッキ時代(Gilded Age)」と呼んだ。

鉞子が向かったオハイオ州は、まさに変化しつつあるアメリカの真っ只中にあった。南部のヴァージニア州が「建国

の父祖たち」を生んだ農業を基盤とする保守的な州だったとすれば、北部のオハイオ州は、19世紀後半アメリカ資本主義を発展させた先進的な州だった。

シンシナティは、西部開拓の主要ルートであったオハイオ川の交易港として栄え、「西部の女王」と呼ばれた。街には雑貨店、ホテルなどが立ち並び、西部へ向う人たちで賑わった。鉄鋼、食肉、衣料、木材、消費材などで栄え、1880年代末には人口30万、オハイオ州最大の都市となった。

シンシナティは逃げてくる南部の黒人奴隷たちを保護して逃亡を助ける所謂「地下水道」の重要な拠点ともなっていた。内戦が勃発すると、シンシナティは連邦軍（北軍）の橋頭堡となった。

フローレンスとの出会い

鉞子は松雄が懇意にしていたシンシナティのウイルソン家で結婚式をあげた。ウイルソン家の当主オーベッドは教科書出版で財を成した資産家で、夫妻とも敬虔なメソジスト派のキリスト教徒だった。メソジスト派は、18世紀のイギリスで生まれたプロテスタントの一派で、質素で規則正しい生活方法（メソッド）の

実践をめざすことで知られている。イングラント国教会から迫害され、新大陸アメリカへ渡ったピューリタンである。西部開拓と共に信者をふやした。

ウイルソン夫妻は大の親日家でもあった。夫妻は船旅で、1886年秋にオーストラリア、ニュージーランドへ行き、翌年春、日本に立ち寄って4、5か月間滞在し、日本の文化や日本人の魅力に目が開かれたという。このときに同行したのが姪のフローレンス・ウイルソンだった。結婚式で花嫁の鉞子に付き添ったのがフローレンスである。彼女も日本が大好きで鉞子を心待ちにしていた。鉞子26歳、フローレンス42歳。まさに運命的な出会いであった。

フローレンスが生まれたのは、オハイオ州のとなりインディアナ州のニューアルバニーである。シンシナティから車でおよそ2時間、歴史から忘れられたような静かな町である。しかし19世紀半ばこの町は、蒸気船建造や農産物の集荷場として栄えていた。フローレンスの父ジョン・ウイルソン（オーベッドの兄）は弁護士で共和党員、リンカーンの熱心な支持者だった。

1869年フローレンスは地元のプロ女子学院へ入学した。13歳のときであ

る。学校は4年制で寄宿舎生活を義務づけられていた。彼女は特に英文学に関心が高く、シェークスピアを研究している。

「授業中の私語は一切禁止」「寄宿生は先生の同伴がない限り学校の敷地の外へ出てはならない」「通俗小説を読むことを禁ず」など厳しい規則を定めていた。鉞子が入った「武士の教育」にどこか通じるものがあり、フローレンスがのちに「武士の娘」鉞子にこのほか親近感を抱いたこともうなずけるのである。興味深いのはフローレンスの卒業エッセーである。「女性の本望は、政治の世界や討論会の闘士になることではなく、愛すべき『家庭の王国』の戦士になることにある。家庭にこそ女性の気品が輝くのであり、女性の影響力が力をもつのである」と書いている。当時アメリカでは、女性のあいだから禁酒運動や婦人参政権運動が高まり、女性の社会進出が大きな話題になっていた。そうした時代的な変化のなか、あえて「家庭の大切さ」をフローレンスは強調していたのである。

鉞子の里帰りに同行

明治35年（1902年）春、鉞子は3歳になる長女花野を連れて越後長岡へ里

帰りしている。このときフローレンスが同行した。一度日本に住んでみたい、とフローレンスが強く希望していたらしい。鉞子は、フローレンスと一緒に1年間近く長岡に滞在した。2人の友情はますます深まった。鉞子は、翌年アメリカへ戻るが、フローレンスはそのまま残り、もう一冬を過ごす。このときの体験が、のちに鉞子が『武士の娘』を執筆するときに、フローレンスが貴重な助言を与えることを可能にしたのである。なによりも鉞子が日本独特の伝統文化を英語で表現するときに、フローレンスの助けがなかったら、欧米人が理解し感動するような英文にはならなかったのではないかと考えられる。

長岡でフローレンスは、まさに伝統的な日本の田舎の文化になじんだ。彼女は畳の上に何時間でも静かに座っていた。食事もすべて日本のものを食べた。「わたしは日本人と同じように感じ、同じように考えていたのです」と話していたという。

このときフローレンスは長岡中学に雇われ英語を教えた。長岡中学で初めて女性教師（それも外国女性）を採用したのは、校長の坂牧善辰である。当時35歳。坂牧は東京帝国大学哲学科卒業。一高時代に



フローレンス・ウィルソン
(着物姿1915年頃東京にて)

漱石と同期だった。坂牧は石油成金の息子たちを学校で狼藉をはたらいたとして退学させたが、成金の父兄たちがむしろ坂牧校長を排斥・追放した。その経緯は漱石が小説『野分』でとりあげている。

『武士の娘』執筆

1908年松雄の店が倒産し、鉞子は娘2人を連れていったん帰国する。2年後、松雄は急死。フローレンスに「鉞子と娘たちをよろしく」と遺言したという。そこでフローレンスはシンシナティの家を売り、東京の鉞子たちの元へきて東京で一緒に暮らした。しかし1916年鉞子は帰国子女の娘2人の教育のため、再びアメリカのシンシナティへ渡った。その後花野がコロンビア大学の姉妹

校バーナード・スクールに入学するため、1918年ニューヨークへ移った。48歳だった1920年から7年間、鉞子はコロンビア大学で日本語及び日本の歴史を教えた。コロンビア大学で日本女性が長期的に講師として採用されたのは初めてだった。鉞子がのちのコロンビア大学の日本文化研究講座の基礎を築いたといっている。当時、大学の界限では、「教壇に立つ小柄な和服の婦人」として話題になった。

しかし生活は決して楽ではなく、フローレンスに勧められて、鉞子は新聞や雑誌へ投稿する。フローレンスが英語の推敲を手伝った。2人の共同作業であった。

鉞子のエッセーを評価し、『武士の娘』執筆をすすめたのは作家のクリストファー・モーレーだった。

モーレーはペンシルヴェニア州のハーヴァード・フォード・カレッジを首席で卒業、ローズ奨学生としてオックスフォード大学に留学し近代史を学んだ。編集者、コラムニスト、小説家、詩人。著書はベストセラーとなった『キティ・フォイル』（1939）ほか多岐にわたる。

『武士の娘』は1925年ニューヨークで出版されると、大変な評判になったが、モーレーは「歴史が正しく書かれさ

えすればロマン小説など必要でなくなる」というアメリカの国民的詩人ホイットマンの言葉(『草の葉』序文)を引用して賞賛している。「杉本鉞子の本はまさに正しく書かれた歴史の本だ」というのである。

時代的背景

その時代的背景を考えると、第1次世界大戦という未曾有の体験をしたあの世界だったということである。

大戦後の1920〜30年代とは、一言でいえば、「繁栄と幻滅の20年」だった。アメリカは戦争景気のおかげで未曾有の繁栄を享受し、豊かな繁栄の中で「マネー・ゲーム」の熱狂に多くの人たちがのめりこんでいった。他方では、それまで意味をもっていた宗教やモラルや価値観に疑問が投げかけられ、「家庭崩壊」という深刻な変化が生まれ、従来のコミュニティが機能しなくなりはじめた。

多くの人たちは、繁栄や自由を享受しながらも、どこか自信を失い不安を感じていた。繁栄にも自由にもなじめない若者たちは「ロスト・ジェネレーション」と呼ばれた。ウォルター・リップマンは、「道徳論序説」のなかで「今日の若

者たちは、人生にはなにか意味がある、という確信を失った」と書いている。時代は豊かで自由になったが、若者たちの多くは生きる目的がわからなくなっている、というのである。繁栄と狂奔は1929年の大恐慌とともに崩れていった。同時に、『武士の娘』に描かれた謙虚でゆるがない日本人の生き方や考え方が、アメリカや世界の読者に感動と共感を与えたのである。

ジャパン・ソサエティの応援

『武士の娘』には、ジャパン・ソサエティ版といわれるものがある。(ジャパン・ソサエティは1907年に創立された日米親善のための組織で、百年以上たった今も存続している。)

これはジャパン・ソサエティが出版社に特別発注をした初版本で、杉本鉞子の署名つきである。当時の新聞によると、ジャパン・ソサエティは2500部をオーダーして頒布している。当時アメリカでは日本移民の制限が行われ、日米間に緊張が高まっていた。『武士の娘』は日本を理解するための重要な教養書と評価されたのである。

ジャパン・ソサエティが杉本鉞子に注

目したのは、無論その本の内容もあるが、当時の理事長がヘンリー・タフトであったことが幸いした。タフト家は、鉞子が最初に住んだシンシナティの名門である。ヘンリーはニューヨークの著名な弁護士で、ジャパン・ソサエティ理事長を1922年から通算14年も務めた。親日的で日米親善に心をくだいた。弟のウィリアムはフィリピン初代総督、大統領、最高裁長官等を歴任し、ヘレン夫人は、東京市長尾崎行雄から贈られた3千本の桜の苗木をワシントンのポトマック河畔に植樹したことで知られている。タフト家は鉞子の家族とも交流があった。しかしジャパン・ソサエティやタフト家の努力も虚しく、1931年9月満州事変が起こり、日米関係は暗黒の時代へと進んでいく。

鉞子が語りたかったこと

1932年末、鉞子は本を出版してくれたニューヨークのラッセル・ダブルディ夫妻にフローレンス逝去の悲しみを伝えている。

「言葉と精神のいかなる意味においても、彼女は私の母でございました。30年以上にわたる私の友人でした。：彼女は

まるで眠るように逝ってしまわれました。これまで私の生涯でみた最も美しい最後でした」(筆者訳)

フロレンスは鉞子を支え執筆に協力したが、自分の名前を出すことを禁じた。だから『武士の娘』の中でフロレンスは「一切登場しない。恐らく『アメリカの母上』という表現がフロレンスにあたるであろう。それは「無償の行為」ともいえるものだったが、鉞子にはわかっていた。キリスト教信仰に篤いフ



ローレンスが鉞子に捧げた「愛のかたち」だったのである。杉本鉞子は『武士の娘』のあと、『成金の娘』、『農夫の娘』、『お鏡お祖母さま』を書いている。彼女がなにを語ろうとしたかといえば、まず第1に家庭愛や人間愛が大事だという世界共通の価値観である。第2にどんな運命にも挑戦する不屈の精神、負けないうという意思の強さが大事ということである。第3に、民主主義の精神ということである。個人の尊重であり自立心である。第4に「非戦」ということである。戦わずして勝つのだという考え方である。それは父親譲りの信念であった。

鉞子の魅力は、愛される人だったのではないかということである。鉞子は謙虚でつましく、ユーモアを解し、日本の歴史にも詳しくあった。教養あるアメリカ人にとって、鉞子との対話はいへん楽しかったようである。

鉞子は「歴史」から多くのことを学んだ。世界に例のない独特の文化を築いた日本が、幕末維新を経て、西欧文明を「接ぎ木」のように強引に移植していった歴史の行く末に、大きな疑問を感じていた。漱石にせよ鷗外にせよ、明治の知識人たちの多くは、江戸時代につちかわれた日本人の伝統的な精神や教養と、西

洋的な近代化とのズレや葛藤に苦悶していた。

鉞子は国から一銭の援助をうけることなく自力でアメリカへ渡り、通算22年間暮らしてアメリカ人との交流を深めた。英語で『武士の娘』を書くが、日本語を忘れることはなかったし、子どものときに学んだ漢文も覚えていた。

杉本鉞子こそ本物の国際人だった。

(2015年9月24日・公開フォーラム)

【参考文献】

杉本鉞子著、大岩美代訳『武士の娘』

(ちくま文庫)

内田義雄『鉞子 世界を魅了した「武士の娘」の生涯』(講談社)、『武士の娘 日米の架け橋となった鉞子とフロレンス』(講談社+α文庫)

【註】写真提供「杉本鉞子研究会」ほか(無断使用禁ず)

講師略歴(うちだ よしお)

1939年新潟県長岡市生まれ。東京大学西洋史学科卒業。NHK入局、新潟放送局、外信部、サイゴン、ニューヨーク、報道局、NHKエンタープライズ・アメリカ社長歴任。現在、フリー・プロデューサー兼著述業。

李香蘭と上海、香港

テレビ朝日元台北支局長、売文業 高橋政陽



2014年9月、香港の茶楼で

「李香蘭が逝ってしまったってニュースで聞いてから食事も喉を通らないのよ」

山口淑子さんの逝去公表から2日後、李香蘭とともに1940年代の「上海七大歌后（歌の女王）」に数えられた姚莉さんと2年ぶりに香港北角の茶楼で再会した。上海村との別名を持つこの街には、解放前後から多くの上海人が流れついた。ブラウスも杖も真紅の薔薇が数えきれぬ程あしらわれている。代表曲「玫瑰玫瑰我愛你（バラよバラよ、君を愛す）」に因んだおめかしだ。山口さんより2つ若い92歳。七代歌后のうち健在なのは彼女だけになってしまった。

「久しぶり。元気だった？」

姚莉さんを中国懐メロ好きの友人に紹介されて以来、香港を訪れる度にこの茶楼で飲茶をしては昔話を聞かせてもらっていた。

湯気を立てた熱々の点心を前にしても一向に箸が動かない。山口さんが元気だった頃、この茶楼から私の携帯電話で山口さんに国際電話をかけるのが常だった。

「姚莉、貴女の方が若いんだから東京に来てよ」と山口さんが言えば、姚莉さんは「私は足が悪いんだから貴女こそ香港に来てよ」と返すのがお約束だった。2人は、1967年に亡くなった姚莉さんの実兄、作曲家の姚敏の葬儀以来、会っていない。

「兄と李香蘭は上海時代から每晚、飲

んでは音楽の話をしていたわ。2人とも強くて夜通し。下戸の私はお先に失礼ばかりだったわ」

姚敏は服部良一から西洋音楽を学び30、40年代の上海を代表する作曲家となって山口さんにも多くの曲を書いた。戦後、山口さんが映画撮影のために香港に訪れ、上海から香港に逃れた姚敏と再会、酒盛りは再開した。

姚莉さんは、生前の山口さんのことを偲んだ二晩、大事なことを思い出したという。

「ある時、兄が言ったの、李香蘭が好きだって。私も好きよって言ったら、バカ！ お前の好きと俺の好きは違うんだって」

姚莉さんが甘く切ないメロディーを口

ずさんだ。その旋律を耳にすると山口邸で戦後の聞き書きをしていた、ある夜のこと走馬灯のように頭をよぎった。

冬夜裡吹来一陣春風 心底死水起了波動
雖然那溫暖片刻無蹤

誰能忘卻了失去的夢
你為我留下一篇春的詩

卻叫我年年寂寞過時
直到我做新娘的日子

才開始不提你的名字
可是命運偏好作弄 又使我們無意間相逢

我們只淡淡的招呼一聲
多少的甜蜜 辛酸 失望 苦痛

盡在不言中

「この曲ご存じ? 『恨不相逢未嫁時』って大好きな曲なの。漢文調なら『未だ嫁がざる時に、相逢わざるを恨む』よね。これを日本語にして『結婚する前に会いたかった』じゃ情感もないわよ」

その後は冗長で同じ時間の中に込められる意味では中国語に太刀打ちできない、と日中比較言語論になり、この曲に込められた山口さんの思いまで気が回ることなかった。姚莉さんが続ける。

「兄だけじゃないのよ。陳歌辛も! それで兄が曲を、陳歌辛が詞を書いて自

分たちの気持ちを伝えたってわけなの」
中印クウォーターの陳歌辛は姚敏と並ぶ上海を代表する音楽家である。七代歌後の多くの曲を姚敏とともに紡ぎだした。3人の間に一体何があったのか。

「兄も陳歌辛もその時すでに家庭を持っていたの。だから諦めたんでしよう。それが『恨不相逢未嫁時』という曲になったのよ」

50年代に香港のショーブラザースの映画撮影のため香港を訪れた山口さんと姚敏は上海時代と同様に夜明かしして飲み、帰宅しなかった朝があった。姚敏夫人は激怒して、家庭争議に発展。離婚の危機すらあったとか。恋恋不舍(好きで好きで忘れられない)——姚敏と陳歌辛は3人の秘恋、そして悲恋を「未嫁時」と男女を逆転させて、李香蘭に歌わせたのだった。そして、李香蘭は2人の気持ちをしっかりと受け止めていた。陳歌辛の子息で、音楽家として現在も中国で活躍する陳鋼に山口さんはこう語ったことがあったという。

「もしかしたら、貴女のお父様と一緒になっていたのかもしれないのよ」

山口さんに上海時代、香港時代の事績をもっともっと聞いておけばよかった、後悔の念が頭をよぎったが、全ては後の

祭り、山口さんも姚敏も陳歌辛も亡くなった今となっては全ては闇の中である。

「七代歌后の中で一番若くてミソっかすだった私だけが残っちゃったのね。李香蘭は全然違ったわ。押しも押されぬ大スター、私の憧れの的だったの。歌は私や周璇と違って本式だし、北京語も日本語も英語もお芝居も上手だったし。李香蘭が死ぬ前に会いたかった、何で東京に行かなかったんだろう。どうして香港に来てくれなかったんだろう」

姚莉さんは湯気が立つこともなくなっただ点心に全く箸をつけようとしなかった。

「私も早く李香蘭に会いに行きたいわ……」

どうやって励ましたらいいのか、焼売を口に運び茶をすするふりをして言葉を探していると、天上の山口さんから言伝てが届いた。

「姚莉姐さん(中国語では年長の女性を姐と敬意を込めて呼ぶ)、そんなことしたらお兄さんも李香蘭も怒りますよ。これから陳歌辛と一緒にこの世でやり残したことをしようとしているのに、姚莉が来たらできなくなっちゃうじゃないか。まだ暫くはこの世にいなさい、って3人とも口を揃えて仰ってますよ」

天上から李香蘭の励ましの言葉を聞いて

て、しばし黙っていた姚莉さんの表情には漸く笑みが見え始め、冷え切った点心に箸を伸ばしたのだった。

3冊の自伝と上海、香港

山口さんは生前、3冊の自伝を著した。『李香蘭 私の半生』（藤原作弥共著。新潮社、1987年7月20日）、『戦争と平和と歌 李香蘭 心の道』（東京新聞出版局、1993年9月15日）、『李香蘭を生きて』（日本経済新聞社、2004年12月7日）である。藤原作弥との共著である『私の半生』は戦後40年余しかたっていない1987年に発表され、噂では耳にしたことはあっても真相はまだ厚い神秘のベールの中にあった山口さんの前半生を初めて公にした大作である。

山口さんは取材後の原稿チェックには極めて厳しい人だった。山口さんから聞き書きをしたさる映画評論家は、その厳しいチェックに音をあげて発表を断念しかけたと書き残しているほどである。初めての自伝執筆の際に配慮しなければならぬ点は現在の比ではなく、藤原作弥氏の受けたチェックは映画評論家とは桁違いに厳しいものであったろう。『私の半生』に山口さん自身が書き残している

ように、映画「白蘭の歌」「支那の夜」「熱砂の道」のいわゆる大陸3部作を山口さん自身が目にして、数日も眠れなくなるほどの衝撃を受けた中、2人は涙も干上がるほどの厳格なやり取りの末に事実を確定、初の自伝を書き上げた。その完成度は極めて高く、李香蘭欽定史と言っている。

この後の2冊は欽定史である新潮社本のそれぞれ6年、17年後に出版され、その間の山口さんご自身の変化や新たな発見が補遺として加えられている。東京新聞本には3期18年に渡った参議院議員生活の後のものだけに、訪朝時の歓迎宴で金日成から「蘇州夜曲」をリクエストされたエピソードなど山口さんならではの各国首脳との交遊が、日経本には山口さんの幼馴染であり命の恩人であるロシア人、リューバの兄が戦時中、日本軍に捕らえられ、731部隊の犠牲になったという衝撃の事実をNHKのドキュメンタリー取材で訪れたロシアでリューバとの再会の際に知らされ、自らの身を切られるほどの痛みと苦しみを味わったことなどが書き加えられている。この3冊からはアジア最大の歌手、女優から戦後、世界の大舞台、銀幕へと羽ばたいたばかりか外交官夫人、ジャーナリスト、国会議

員と一身にして三世も四世も生きた山口さんの前半生が一瞥できる仕掛けになっている。しかし、その史実の多くは新潮社本が基底をなしている。戦後の後半生を聞き書きさせてもらいたいと相対した時も、戦後の事柄であるにも拘らず、回答の多くは新潮社本の中そのものか、そこから派生したものが殆どだった。山口さんとの共通点であった花より団子以上に、後半生の聞き書きを断念せざる得なかった重大な原因だった。

この3冊は上海時代、特に香港時代への言及が極めて少なく扱いが冷淡である。『私の半生』の15の章立ての内、第12章「萬世流芳」、第13章「夜来香ラプソディー」、第14章「上海1945」、第15章「さようなら、李香蘭と後半の4章が上海時代に当てられ、量的には十分にも見える。それなのに冷淡さを感じざるを得なかったのは、山口さんが時折口にされていた上海、香港時代への深い郷愁が行間から伝わって来ず、単なる回顧に終わっていたからだだった。山口さんの上海、香港への思いは深く、熱いものだった。

「私は上海で『萬世流芳』を撮って初めて中国の女優になれたのよ」

李香蘭は1938（昭和13）年、満映作品「蜜月快車」で銀幕デビューを飾り、

長谷川一夫と共演した「白蘭の歌」「支那の夜」「熱砂の誓い」の大陸3部作でスターダムにかけのぼった。しかし、映画が公開されたのは満洲と日本、日本海を跨いだ2本脚のスターでしかなかった。当時、東洋のハリウッドと謳われたアジア随一の銀幕の都、上海で李香蘭主演映画が上映されたのは虹口日本人居留区の邦画館にしか過ぎず、観客も殆どが日本人であった。「支那の夜」が上海の封切館で上映されたのは43（昭和18）年のことである。

『萬世流芳』を撮って初めて中国の女優になれたのよ」

「萬世流芳」は英国と戦う林則徐と3人の女性を主人公に、川喜多長政率いる中華電影と上海一の大プロデューサー、張善崐が阿片戦争百年を記念して製作した大作である。日本はこの映画の中で交戦中の敵、英国を相手に見据え、観客である中国人は英国を日本に読み替えた。川喜多と張の2人が借古諷今手法で日本軍、重慶側の両方を見事に謀って世に出した労作でもある。

山口さんのこの一言は、上海の当時のトップ女優、陳雲裳、袁美雲らと「萬世流芳」に主演し、山口さんの歌う挿入歌「売糖歌」が重慶、延安を含む日本軍非

占領地域でも大ヒットしたことを物語っている。日本や東京を座標軸に置いた思考では想像がつかないことかもしれないが、中国だけではなくアジアの映画の中心だった上海を中心に据えれば、辺境にしかすぎない満洲と海に向こうの日本で人気を博している満映女優、李香蘭が東洋のハリウッドにいよいよ登場、さてお手並み拝見というところだったのだろう。その期待に応えたどころか、李香蘭は陳雲裳、袁美雲ら中国のトップ女優と伍して見事の演技を見せ、甘く切ない歌声は全中国だけではなく華僑の多い南洋の地まで鳴り響いたのだった。また、山口さんご自身にしても満洲新歌謡の歌い手となつて全満洲に向けて歌った曲目の中に、当時の上海の流行歌、映画主題歌が少なからずあり、銀幕デビューの前から芽生えていた上海への憧れが現実の毎日となつた生涯忘れえぬ作品だった。『私の半生』にかかれてるように、当時の上海一の大歌手にして大女優、周璇とは山口さんの持ち歌「夜来香」のレコーディングの際に劇的な出会いをし、その後も親密な交友を重ねたという。周璇の遺児、周偉一家が亡母が遺言で必ず訪ねるように言い残した、と山口さんを表敬し、ミュージカル「李香蘭」をともに鑑賞したのは

戦後60年を翌日に控えた2005年8月14日のことだった。周偉は劇中で野村玲子が歌う亡母の「何日君再来」、そして故郷を追われた満洲のゲリラが郷土を偲んで歌った「松花江上」を日本の役者たちが中国語で歌うのを耳にして感涙に打ち震えていた。その年の暮れ、李香蘭の恋人とも取りざたされたことのある台湾出身の汪兆銘国民政府高官、中華電影の幹部だった劉呐鷗の遺児も山口さんを訪ねてきた。中国の客人の席には随分と同席させていたのだが、上海時代に端を発するものが殆どだった。

「引揚げてきてから暫く映画の世界から離れていたのは中国の映画仲間の安否が分からなかったからなの。彼らが香港で元気にしていると分かったから映画の世界に戻ったのよ」

46（昭和21）年、山口さんが上海から川喜多長政とともに引揚げてきてから、48（昭和23）年の銀幕復帰までに暫くの空白がある。この間にはリサイタル、舞台劇などに挑戦していたが、この理由を訊ねるとどこにも書かれていない事実が明らかになった。

「萬世流芳」に出演、制作を担当した少なからぬ上海映画人は戦後、解放後、山口さんと同じように数奇な運命を余儀

なくされる。日本軍占領下の上海に残った中国映画人は日本の国策会社中華電影の下で映画制作を心ならずも続けざるを得なかった。このため、日本の敗戦前後には国民党から、解放前後には共産党から漢奸罪で遑及されることを恐れ、香港などに逃れた。上海映画を代表する大プロデューサーで川喜多の良き理解者、協力者であった張善崑は44（昭和19）年、日本軍憲兵隊に拘束されて釈放の直後に重慶に去り（重慶との密通は公然の秘密だった）、監督だった卜萬蒼、馬徐維邦、李香蘭の相手役だった王引、主演した陳雲裳、袁美雲や姚敏・姚莉兄妹らも香港へと去っている。山口さんは身一つで引揚げ、食うや食わずの焼け跡タケノコ生活の中、上海から香港へ逃れた仲間の安否を気かけ、彼らの安否が分かるまでは銀幕復帰を控えていたのだという。同じ映画を撮った同志が異郷で所を得ぬ生活を送っているのに自分だけが映画に戻っては申し訳ない、と。何と深い思いだろうか。しかし、44（昭和19）年から引揚げまでの2年足らずの上海時代に、ここまでの深い気持ちを抱かせたのは、「萬世流芳」がこの作品で中国の女優になれたと山口さん自身が代表作と感じていたこと、この作品とともに汗を流した映画

人を生涯の友と思われていたからなのではないのか、と察している。

デビュー作「蜜月快車」から4本の満映作品には見どころはなく、人氣に火が付いた大陸3部作以降の作品の殆どは日本の映画会社大手と満映の共同制作を看板にしていたが、満映は李香蘭をレンタルしただけで、実際は日本の映画会社が制作と言っても差し支えない。そして、満洲でも日本でも、日本人の出自を隠し中国娘を演じなければいけない最も過酷な環境の中にいた。そうした後に訪れた「萬世流芳」撮影組は山口さんにとって初めての中国映画の制作現場であった。日本軍の占領下とはいえ、上海には大戦中の世界が失った自由の残り香がまだ漂っていた。日本人が満人か、最も懊悩していた宿命的なアイデンティティの問題を忘れ、中国の女優になる夢を見、その夢を秒刻みで実現していた場であったのだ。『私の半生』では「萬世流芳」の相手役だった王引は撮影の刹那、李香蘭が日本人であることを看破したが、さり気なく知らぬふりをしてくれた、ともある。現場での喜怒哀楽、そこで流した汗と涙は少なくとも山口さんにとっては占領者と被占領者という不幸な関係、国籍と国境を超えたものだった。だから、生涯忘

れえぬものとなったのであろう。

上海時代の旧友たちへの深い思いが50年代に山口さんをして香港に向かわしめ、5本の映画主演につながった。そのうちの2本は「萬世流芳」の監督だった卜萬蒼、相手役だった王引が監督しているのである。そればかりではない。香港で山口さんはなんと、李香蘭の旧名に戻って映画に主演し、主題歌や挿入歌のレコーディングをしているのである。

3冊の自伝が上海時代、特に香港時代に冷淡である原因は実はここにあると晩年である。『私の半生』の引揚げシーンはドラマチックである。こんな印象的な別離が現実にあったとは今でも信じがたい。事実は自伝よりもドラマよりも奇なり、である。波止場の係官に一度は引き留められながらも漸く引揚げ船に乗船。遠ざかっていくバンドの摩天楼を眺めていると、船内放送で「夜来香」が流れてくる。そして、決別をするのである。

「さらば中国、さらば李香蘭」と。何も知らぬ少女だったとはいえ、聖戦と御国のためを信じてやってきたことの殆どがまやかしだったと知った時、決別は当然の決断であった。自分が良かれと思って滅私奉公してきたことは、生を受けた愛する国、中国への侵略の文化的な先兵に

しかしさすが、敗れてみれば知らされることとなかった大陸四百四州での日本の落花狼藉が堰を切ったように暴かれたのだから。

しかし、戦後日本は戦前の軍国主義の過ちへの過度な反省から、左寄りの風を長く吹かせすぎたのではないか、とも思う。山口さんが実は望んでいた李香蘭への回帰をこの風が長く阻んでしまっていた。新潮社本が世に出た87年はまだそんな風が力強く吹いていた。そうした環境の中では李香蘭の旧名に戻って映画を撮り、レコーディングした香港時代を詳述することは過度に戦争責任への反省を知らず知らずのうちに強要されていた山口さんに許されることはなかった。戦前はイノセントな満洲娘を演じることを強要されたのと同じように、戦後40年余が過ぎても李香蘭と決別し、懺悔と反省を続ける山口淑子を求めていた。その真空地帯に上海、香港時代はすっぽりと吸収されてしまい、自伝の中に大きく扱われることはなかったのだ。

しかし、日本人山口淑子として生を受け、そしてある時期、中国人李香蘭を演じていたことは、戦争責任が、また歴史認識がどうあれ誰もが否定できない厳然たる事実である。一身を綺麗に真っ二つ

に割ることなど誰もできやしない。あの小さい体の山口さんは戦前は出自を偽らなくてはならなかったことで、戦後は李香蘭への回帰を世間が許さないことで懊悩を続けたと言ってもいいのではないか。それを強く確信したのはある酒席でのことだった。紹介しようと連れて行った友人が戦前の上海時代の山口さんのセピア色のブロマイドを探してきて、サインをねだった。友人へのサインを済ませた山口さんは、今度は当方に微笑みながらこう問うてきたのだ。

「折角だから高橋さんにも一枚いかが。山口淑子にする？ 李香蘭にする？」

どちらをお願いしたか、それは言うまでもない。李香蘭とさりとサインしたときの表情は生涯忘れられない。戦前も戦後も一貫して漂っていたアイデンティティの苦界から漸く解脱されたようにしか見えなかった。

山口さんはご自宅での最晩年、上海と香港でレコーディングした中国語歌曲ばかり聞いていたとご遺族から伺った。日本語の曲名、歌詞はつまらないということだけがその理由ではなからう。その時、山口さんの中には上海の、香港のどんな情景が駆け巡っていたのだろうか。

2015年5月1日、香港文華東方酒店

約束の時間に伝説の大女優、陳雲裳さんが香港サイド最高級ホテルの香港文華東方酒店（マンダリンオリエンタル香港）の珈琲庁に姿を現した。「萬世流芳」公開後ほどなく銀幕を一旦引退した彼女は、香港に居を移し、戦後、張善崡に請われて香港で数本の映画を主演した以外は芸能世界と隔絶して暮らし、新聞・テレビもその姿を伝えることはなかった。原節子以上の神秘性を湛えた伝説の大女優である。

お元気だった頃の山口さんから彼女の連絡先を知らされ、香港訪問の度にご主人のクリニック、自宅に電話連絡をしたが、奥様は海外にという返事ばかりでアメリカあたりに移住したものだとかかり思いこんでいた。しかし、香港に戻っているらしいと友人から知らされ、山口さん逝去直後に自宅に電話を入れるとようやく連絡がつき、半年の歳月を経て面会が実現した。李香蘭共通の友人として彼女の冥福を祈ろうとの趣旨だった。

「李香蘭とは50年代だったか60年代の初めに、スイスで偶然再会したんです。主人と旅行の最中にホテルでばったり」

山口さんの欧州滞在はイサム・ノグチと結婚しながら米国査証を長く拒否され、欧州などを転々とされていた時代か、銀幕を引退後に外交官夫人としてジュネーブにいらしたときのいずれかであろう。「その後は香港に來ると我が家に泊っていたのよ」

彼女にはどうしても確認したいことが一点あった。『私の半生』に書かれていた彼女の引退に関わるエピソードである。『私の半生』には上海に入港した日本軍艦艇に花束贈呈を要請された陳さんはこれを拒否したものの、一切報道しないと軍側の妥協したことかから応じたところ、翌日の新聞が大々的に報道。脅迫状が殺到して、銀幕引退の大きな原因になったと書かれている。

「そんなことはありません。私は主人と結婚したから引退したんです」

陳さんは『私の半生』の一節をきっぱりと否定した。

「日本軍からそうした要請がよくありました。拒むことは難しかった。今は時代が違うから分かってもらえないかもしれないけど、時代が違ったのよ」

「時代不同」という一節を陳さんは何回も繰り返した。占領者、日本軍の要請は泣く子と地頭のようなもので断れば身

に危険が及ぶ。しかし、これに応じたことが世間に知れ渡れば漢奸、売国奴として同胞から厳しく指弾される。日本占領時代の上海は中国人にとっては退くも地獄、進むも地獄の世界だった事実が「時代不同」という言葉には含まれている。

「李香蘭は北の生まれ育ちだから北京語も広東生まれの私とは比べ物にならないかつ、日本語も達者だったから、軍との間に入って、そうした要請を何回もとりなしてくれたわ。歌も上手だったし綺麗だったし。何よりも本当に優しい人だった。寂しい、もう一度会いたかった……」

『私の半生』には翌日の新聞に写真付きで報道されたという具体的な事例が記されている。そこで、上海の友人に新聞資料を搜索して貰ったところ、上海档案館には李香蘭ファイルは存在するものの、その中の公開資料はごく少なく、花束贈呈に関するものは一切なかった。また、新聞資料を搜索しても陳さんが花束を贈呈した事実も、その該当時期に日本軍艦艇の上海入港の確認がでなかったという意外な回答が戻ってきた。

陳さんの発言が事実だったと判断せざるを得ない。満人を演じさせられた李香蘭、山口さんは陳さんから中国人同業者の置かれた環境を単なる日本人よりも容易

に理解できたことであろう。陳さんの言う通り、彼らの立場を思った山口さんが軍側とのとりなしに奔走したことは事実であろうし、その気持ちの強さが陳さん引退の理由を軍による花束贈呈の強要に結びつけたのではないだろうか。それは山口さんにしかなしえない美しき誤解である。

国策映画、漢奸裁判などの謎

山口さん逝去から1年余り、前半生を辿ってみたが、この花束贈呈事件だけではなく、いくつかの謎が浮かび上がってきている。山口さんが生涯悔やんだ大陸3部作の国策映画批判に関して、ある友人が内閣情報局映画審査部門の資料を渉猟したところ、大陸3部作は商業主義に走った映画屋どもが売らんかなで作ったメロドラマに過ぎず、国策映画を徹底させる第一対象であるという衝撃的な資料が発掘されている。山口さんの深い悔悟とは裏腹に、当局は全く時局認識に乏しいメロドラマと断じていたのである。

また、ミュージカル「李香蘭」でも最大の見せ場である上海軍法廷判決言い渡しのシーンに関しても、実は資料的な裏付けができていない。上海の友人が裁

判資料も併せて渉猟してくれたが、起訴状、判決文とも全く見つからないという。中華電影に關係した中国映画人、音楽家は日本の敗戦後、漢奸罪の容疑で取り調べを受けている。汪兆銘南京政府要人で中華電影の名目上のトップ2人だった褚民誼、林柏生は死刑判決を受けているが、映画監督、俳優、音楽家で起訴されたものはいない。これは中国映画史の中で史実として確定している。

『私の半生』は87年に刊行され、当時

は中国の歴史資料搜索のハードルが今よりも遥かに高く、山口さんの記憶をもとにした口述の裏付けを取ることは遥かに難しかった。それは時代の制約そのものだろう。しかし、花束贈呈事件、漢奸裁判資料の資料搜索の結果が物語っているように、『私の半生』に書かれ、ミュージカル「李香蘭」

最大の見せ場も花束贈呈事件と同じように山口さんの強い贖罪意識が生んだ美しき誤解であった可能性が極めて高い。

美しき誤解は美しいまま後世に伝えるべきなのか、美しき誤解を再度検証すべきなのか、未だに思い悩んでいる。しかし、最近では美しき誤解を解き明かすことこそ、李香蘭を捨てることを戦後の政治の風に強要された山口さんの本当の思いを知る唯一の道なのではないかと考えている。しかし、李香蘭関連の資料は中国国内では多くが公開されておらず、満映

李香蘭

映画と音楽



幻の『私の半生』上映

シンポジウム開催

慶應義塾大学文学部
創設125年記念行事

会場：慶應義塾大学三田キャンパス 北館ホール
日時：2015年9月12日(土)

13:00～14:40 上映
『私の半生』(島津保次郎監督/李香蘭主演/1943年/満映・東宝合作/99分)

15:00～16:00 シンポジウム・第一部
『戦争と芸術—戦時下の日本人の思い—』
司会：水野裕子(国際映画学編纂委員・慶應義塾大学非常勤講師)
ゲスト：長尾(日本映画大学特任教授)
若野裕一(編集者・音楽ジャーナリスト)

16:20～17:50 シンポジウム・第二部
『李香蘭と満蒙メロディ』
司会：高橋政隆(テレビ朝日元記者)
ゲスト：阪部克久(作曲家)

総合司会：杉野元子(慶應義塾大学文学部 教授)

作品は封印されたまま。50年代に香港で撮影された映画5本の内、東宝との共同制作だった「白夫人の妖恋」以外はフィルムが散逸したままである。資料は余りにも少なく、生前の山口さんを知る人は何人も残されていない。

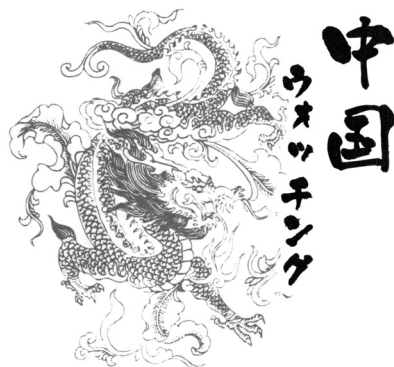
生前、山口さんは「あのリサイタルは生涯忘れられない」と繰り返し懐かしんでいた伝説のリサイタル「夜来香ラプソディー」(45年6月23日から25日、上海大光明大戲院)の幻のスコアの一部を服部良一氏遺族から拝借できたので、これを元に上海、香港で新たな事実の発掘を試みようと考えている。

(2015年10月8日・公開フォーラム)

講師略歴(たかはし まさはる)

早稲田大学文学部卒業、中国留学の後、東京新聞記者を経てTV朝日へ。ニュースステーションディレクター、台北支局長、サンデープロジェクトチーフディレクター。

2007年には日中初の生討論番組となった「朝まで生TV」プロデューサー。『李香蘭の秘めた恋』(「文芸春秋」誌2014年12月)などを発表。



残業の理由は

中山大学社会科学調査センターによる2014年「中国労働力動態調査」によれば残業する従業員の60%が自ら望んで残業しているという。その主な目的は経済的メリットで、次に企業や組織に対する帰属意識や忠誠心を表すため、そしてごく一部が事業の発展や自己実現のためであるという。

2014年の全国賃金労働者の平均賃金は3万1977円で2012年比年平均9・1%の伸

びである。この調査は2012年から香港、台湾、マカオとチベット海南を除いた29の省市の15歳から64歳の労働力人口を対象に隔年で行われ、2014年の報告書は1万4226世帯、2万3594人からのアンケートの回答に基づいている。報告によると、全国の都市労働力の労働参加率は2012年の60・5%から2014年の61・6%に若干上昇、特に広東地区での上昇率が67・1%から73・4%と高い。女性の労働参加率も49・3%から51・7%に上昇している。

だが、青年労働力を核とした労働人口構造はすでに消失している。平均教育年数は9・28年、職業訓練に参加した人の割合や、技術資格の取得率も低い。農村の労働力人口の4分の1が出稼を経験し、さらに4割が今後出稼を希望している。労働の意義については生活の糧という意識が最も高く、能力の発揮がその次、興味の対象という答えが最も低かった。2014年の調査では仕事に対する総合的な

満足度が2012年より安定している。特に満足度が高いのは同僚や仕事仲間についてであり、最も不満を感じているのは昇進の機会に関してであった。

『中国新聞ネット』2015年12月7日

子どもの心を鍛えるには

中学2年、14歳の董くんは冬休みに学校が企画する20人のアメリカ研修交流会について担任の先生が説明するのをきいて目を輝かせた。先生に参加したいと伝えるとともに、QQで両親にその思いを伝えた。

週末、家に帰って両親に話したが、両親は「収入の問題で同意できなかった」という。父親の月収は26000円、母は仕事がなく、1年で1万円貯めるのが精いっぱい、10日間2万円の参加費用はねん出できなかった。6日の朝、董君は学校に戻った。親が反対したと聞いた同級生に皮肉を言われて、彼は傷つき、午後医務室でアモキシシリン（ペニシリン系抗生物質）を買って50錠全部飲んでしまった。

隣の席の生徒が異常に気が付き、すぐに病院に搬送された董くんは一命をとりとめた。

父親によれば、息子の願いをすべてかなえることはできなかったが、息子の教育のためにできるだけのことをしてきたという。家に近い学校では成績が伸びなかった。年間の学費が1万円もする今の学校に転校させ、3千円の北京行きのサマーキャンプにも参加させた。広い世界を見たいという気持ちだったが、まさかアメリカまで行きたがり、こんなことになるとは、と戸惑う父親。母親は子どもとよく話していたが、父親としては話し合いが足りなかったと反省しているという。

一方学校側は通知しただけで、勧めてはいないという。この学校は高校から国際クラスを設けていて、高校3年次には米留留学が組み込まれている。このコースを志望する生徒のための研修旅行で、7千人の生徒のうち参加するのは20人、費用も2万円以上かかるので、説明の時に両

親と相談するように指導したという。また董くんについてはクラスの幹部で将来性のある生徒と紹介し、すぐに病院に搬送すると同時に彼の気持ちを考えて学校で噂にしないよう生徒に指導したという。

専門家によれば、最近の一人っ子は親が懸命に子どもの要求に答えるがために、いざ要求が受け入れられない時には過剰に反応するのだという。時には適度な挫折も必要で、親は時々子どもの要求をはねつけると同時にその様子を観察し、話し合いをし、導くことが大切だという。子どもは友人や教師、両親との交流や体育訓練を通じてわだかまりを解消する術を学んでいくもので、学校も両親もそうした機会を増やすべきである。

『華西都市報』2015年12月9日

帰省切符の受付始まる

春節前の鉄道切符の今年の予約は、インターネットでは60日前から、代理販売所では58日前から受け付けるが、駅では18日

前からしか受け付けない。すでに春節15日前の1月24日から3日前の2月5日までの切符は12月8日までに佛山から西安、長沙、北京行きは売り切れ、南寧、貴陽、杭州、重慶、成都行きは二等席が少ししか残っていない。インターネット受付開始から30分後には売り切れていたという話も聞く。

だが8日朝、多くの人が駅の窓口で買い求めようとして、係員に制度を説明されている様子が見られた。電光掲示板に駅で販売できる切符の乗車日が表示されていて、駅員に説明を受けるまで納得しない人もいる。

代理販売所も訪れる人が少なくない。やはりその多くは制度を理解していない人やインターネットを使いなれていない中高年の労働者だ。販売所にはわずかな立席しかなく彼らは偶然の幸運かこれから決まる臨時列車に望みを託すしかないようだ。

『羊城晚報』2015年12月9日

友人の飲みすぎにも注意

湖南省長沙市のある外資系企業で通訳を務める李さん(仮名)は仲間と一緒に食事とカラオケに行つて泥酔。友人は李さんをホテルの部屋で休ませたが、夜食をとっている間に、李さんは亡くなった。遺族は友人たちが過度の飲酒を止めず、介抱の義務を怠ったとして幹事と参加者を訴え、長沙市天心区法院で一審が行われた。焦点は李さんの死因と被告5人の責任である。

法院は事実関係から重度のアルコール中毒による死亡と認定した。また、本人が成人で日ごろから飲酒の習慣があり、当日の洋酒も自分で選択していることから、主な責任は本人にあるとした。友人5人については、飲酒の強要や飲み比べはなかったにしても、酒席を共にしたことが事件の発端であること、同席したものとして安全に配慮する義務があったとして、幹事に8%の賠償責任、その他の参加者に5%の賠償責任を課すとしてそれぞれに約4万8千元、約3万円の支払いを命じた。

『華声在線』2015年12月12日

奨学生は食事を控えるべきか

武漢晚報によれば、華中農業大学は最近貧困学生助成金に関する新しい決まりを発表した。

大学の食堂での支払いに使う専用カードに記録されている過去15日間の昼食、夕食の利用額の平均値が、上位10%に入った学生は「貧困学生」の資格を取り消すというものだ。学生たちの推計によれば、女子は1食6・2元以下、男子は7・2元以下に抑える必要があるという。

この数年、一部の地域では奨学金や助成金に関して不透明、不公平な現象があり、学校が審査を厳しくしている。公平性を確保するという視点は正しいが、食堂の利用額を貧困学生の判定基準にするのは納得できない。いつもデリバリーを頼んだり、外のレストランで食事をしたりしている学生は食堂の利用が少ないに違いないが、彼らは貧困とはいえないだろう。

『工人日報』2015年10月15日



岩間重雄	入江俊輔	井上充	伊大知重男	石原健一	阿部靖夫	青本忠彦
河合浩孝	金澤毅	小川泰一	岡部滋	大野妙子	大井恵美子	牛木久雄

顧問 國 光 史 朗	池坊いけばな教授 近 藤 観 月	坂 本 新 太 郎	諮問会委員 新 宅 久 夫	杉 山 静 夫	鈴 木 昭 治 郎	講演委員会 公益社団法人日本詩吟学院認可 玉峰吟詠会 事業部 幹事 皆伝八段 師範 土屋悠岳（民雄）
寺 西 修 司	長 野 宏 太 郎	顧 問 成 田 正 路	橋 本 公 佑	顧 問 橋 本 秀 樹	半 田 敏 久	理 事 日 野 正 子
常務理事 福 島 靖 男	藤 田 一 幸	常務理事 藤 沼 弘 一	顧 問 古 海 建 一	満鉄会情報センター 理事長 松 岡 満 壽 男	監 事 三 好 正 晴	専務理事・事務局長 村 瀬 廣
村 田 治 雄	国際交流・広報・運営委員会 村 田 嘉 明	顧 問 八 島 継 男	代表理事 会 長 矢 野 一 彌	元参議院議員 山 本 正 和	国際善隣協会「一石会」 会 長 市 川 衛 門	幹 事 橋 本 秀 樹 幹 事 遠 藤 文 夫 幹 事 三 好 正 晴

協会活動
報告

山東理工大学農業工程学院訪日記

科学技術振興機構（JST）

「さくらサイエンスプラン」の助成で当協会が受け入れ機関となり、11月8日（日）から14日（土）までの1週間、山東理工大学農業工程学院の研修団が来日し、農業関係の研究所、大学、工場などを訪問・研修する手伝いをした。

一行は団長王相友教授以下9名で、大崎のホテルを拠点に活動した。

初日の9日は八島、日野、村田、志村、そして中国語通訳者の姜さんと協会側のスタッフが一勢ぞろいし、中国側団員10名と初めての見学先「東京都立食品技術センター」を訪問、食品分析の開放実験室等の見学をした。午後は、秋葉原よりつくばエクスプレスで、つくば市にある農水省の農研機構食品総合研究所を訪問、研究員から「食品への放射線利用」についての講

義を受け研究施設を見学、食品梱包物の「衝撃テスト」などの実験施設などを見学した。

10日は、府中市のサントリー武蔵野工場でビールの生産工程を見学。見学後出来立ての「プレミアム・モルツ」などを試飲し見学を終えた。午後は新宿の「伊勢丹」地下食品売り場を見学した。中国人学生は自分の研究対象の「野菜売り場」で熱心に観察していた。学生たちは食品でも食肉や水産物は研究対象外のため、「野菜」及び「果物」について売り場の陳列を回っていた。

3日目の11日は晴天に恵まれ松戸市にある千葉大学園芸学部を訪問。研究内容の説明を受け、園芸学部准教授と藩陽からの女子留学生（修士）の案内でキャンパスの農園・ビニールハウスなどを回った。大学内の「食堂」で昼食をとり、午後は

東京都庁を訪問。45階の展望から都内を展望、学生たちも満足げだった。

翌12日は大森に移動し、日本最大の取扱量を誇る大田市場を訪問、次いで城南島飼料化センターを訪問した。城南島は人工島でセンターの事業は、スーパーや店舗・学校給食の期限切れ食品等を回収し製品ホッパーにする資源循環型企業である。見学承認通知書には「マスク」着用と書かれていたため、なぜマスクが必要なのかと思ったが、強烈な臭気のためと了解した。

13日は青山の「TEPIA先端技術館」を見学した。農業関係展示ブースを見つけ団員は日本先端技術に興味深く見入っていた。

3時過ぎ国際善隣協会を訪問し、科学技術振興機構「さくらサイエンスプラン」側から、訪日研修終了証が団員全員に授与



された。答礼として、王相友教授による講演があり、山東省淄博市の大学キャンパスの概要説明があった。

5時から理工大農業工程学院の歓迎交流会を開催し、村瀬事務局長の音頭で乾杯し歓迎会が行われ、7時近くまで中国側と歓談し日中交流ができた。長年、日中貿易に携わってきた新宅久夫氏が苦労話を披露し、訪日団の皆さんには親近感を持った人が多かった。

翌日羽田空港に八島顧問・姜晋如さん、村田が見送りをした。再見！
（村田嘉明）

ようよう

陶々俳壇

兼題「鴛鴦」「目」
席題「熱燭」

○鴛鴦の如く暮すと人は言ふ
なにもかも嫌になりたり十二月

佐藤若杉

をしの曲誰か踊らむ水盤に(特仁哉)
どんぐりの芽や黄落重なりし処

鈴木南山

隠沼にひそめし鴛鴦を見付けたり(特紅杓) 大内善一
朶にと選り拾ふや冬紅葉

〃

○駐車場の満の字著るく暮れはやし
○教へ子の講演聴きて冬ぬくし(特宏太・南山)

戸部まもる

○「熱燭！」の一声高く店なごむ

長野宏太

○畳替へ新居の香ありのし歩く

〃

雪吊やか細き枝の命綱

柳原仁哉

☆泳ぐをし一羽潜りて対崩る

〃

奥能登の海黒黒と波の花(特善一)

橋本紅杓

○熱燭と友の笑ひと箸と湯気(特由紀子)

〃

○雑炊の土鍋ぐつぐつ三世代

岡和水

○冬銀河老いを支える家族愛

〃

☆日礼ですます挨拶寒波くる(特まもる)

白井健

☆高圧線大きくたるみ山眠る

〃

目一杯アクセル踏んでくる冬帝
をしどりや影となりゆくまで二人

馬場由紀子

☆最高点句 ○由紀子選 (特各人の特選)

選後評

馬場由紀子

一色にあらぬ荒海神渡し

紅杓

十二月の日本海は暗く荒々しい。その暗さも一色(ひといろ)の黒では描ききれない深さを持っている。

黄落や一葉ひと葉にある離別(わかれ)

健

黄落に人の在りようを見ている。自然と自分が一體となつている。

熱燭と物忘れとは避けまほし

仁哉

熱燭を避けられないことを喜んでいる。一方、物忘れは。なかなか、シュール。

日はかすみ杖をたよりの師走かな

若杉

老いを目一杯嘆いているがどこかユーモアを感じる。

餌撒き場へゆるりと鴛鴦のひとつがひ まもる

鴛鴦の番を通して、人の夫婦の様子が表れてくる。万事、ゆとりのあるご夫婦と見た。

どんぐりの芽や黄落重なりし処

南山

冬になり黄葉も散つてしまった。ところが、そこから芽が出ていたのだ。小さな幸の発見である。

やり残し気がかり多き年の暮

宏太

この句から意外な発見を得た。一年の終りにすべてを終えすっきりするよりも、心残りのある方が来年の頑張りに繋がるのではないかと。

石路の花吾を励ます散歩道

和水

この句を詠んで、みんな喜んでゐる。和水さんの回復が嬉しい。

蕎麦待つ間熱燭二本酌み交し

善一

如何にも呑兵衛の作者らしい句。各地の酒を美味しく召し上がっているにちがいない。

繡線花

鈴木昭治郎

塚の繡線花揺れやまず揺れやまず

由紀子

繡線花(繡線菊ともいふ)がバラ科の「しもつけ」なることを知らなかった私はこの句を句会では頂かなかったが、本誌15年8月号で今はいじみと味わっている。

由紀子先生も先師景翠先生も定型五七五を守ること原則としつつも、これに固執せず、上五は字余りでもよし。しかし中七はなるべく字余り、字足らずにならぬよう心掛けて表現の幅を広げるのも一法ではないかと教えて戴いている。

歳時記で七五五の句を幾つか拾ってみると

花疲れとてみづからに言ひ聞かす 能村登四郎

菊掲げて行きいつまでも遠さかる 山口誓子

愛されずして沖遠く泳ぐなり 藤田湘子

定型の原句を七五五または七五七で添削例

宿浴衣母が一番小さくて 某氏原句

母が一番小さくて宿浴衣 鷹羽狩行

水芭蕉一茎茶室に白き灯を 某氏原句

水芭蕉活け茶室に白き灯を点す 岩垂景翠

ところで、由紀子先生は「青潮」13年新年号で

庭園を草紅葉とし摩天楼 ひろみ

を褒めながらもオリジナリテイを模索していくことが肝心と作者を激励している。それは

摩天楼より新緑がパセリほどの影が見え隠れしているからだ。

因みに狩行のこの有名な句も七五五である。これから

も大いに七五五の句を楽しみたい。

中朝会 通信

新会員歓迎・懇親会開催

11月19日(木)午後3時より、新会員歓迎会と懇親会を実施しました。今年度の新会員は正会員20名、協力会員2名、賛助会員1社とうれしい悲鳴となりました。会に出席いただいた会員は14名で、自己紹介では学者ありビジネスマンあり加えて中国との関連が深い方も多く、今後の協会での活躍が期待されます。

会は恒例のアトラクションから始まり、今回は常連の宝井琴柑さんの講談「五條橋牛若丸と弁慶」と玉川太福師匠、三味線玉川みね子さんと浪曲「清水次郎長伝石松代参」演題で、熱演が聴かれました。なにしろ唾が飛んできそうなまじかでの実演、迫力がありました。

引き続き、懇親会に移りまして招待新会員に加え会員34名、アトラクション参加の琴柑さんも

合流いただき49名の参加者で、大いに歓談に花が咲きました。

今年、入会者が多かったのは満洲関連の縁故者に加え、今夏協会が主催した中国東北旅行の参加者4名が協会の趣旨に賛同して、入会いただいたことが大きな要因となっています。講演会の講師や講演会参加経験者の会員加入が多いことは既知の事実ですが、会員の輪を広げるには、こういったイベントやレクリエーションの開催など参加型の催しが大きな力になっていることを再認識しました。

国際善隣協会が出版

『挑戦する満洲研究―地域・民族・時間―』

70周年記念事業の一環として編集を進めてきた国際善隣協会での講演が、一冊の研究書として上梓されました。

加藤聖文、田畑光永、松重充浩三先生を編者として、本誌『善隣』に掲載された「満洲シリーズ」を加筆等したもので、満洲関連の若手研究者の現時点

での到達点を示すとともに、満洲研究の現代的意味を追求するものです。ぜひ一読の程をお願いいたします。なお、書籍は2400円＋税で書店にて販売されています。表紙裏面に東方書店の広告を掲載しましたのでご覧ください。

会員の方でご入用の向きは、事務局にお申しつけください。

会員だより

◎計報

浅田甲子郎氏(91歳)
平成27年11月29日逝去
河原興氏(84歳)
平成27年10月16日逝去
謹んで哀悼の意を表します

同好会だより

〈謡曲会〉

1月の例会はお休み。次回は、2月2日例会(新年会)です。

編集後記

▽今年もまたノーベル賞受賞者が2名出まして、まことに喜ばしいことです。ところで今回で我が国のノーベル賞受賞者は24名を数えるそうですが、全員が旧帝大を中心とした国立大学出身であることをご存知でしたか。特に昨年から受賞者は、誰かに駅弁大学と揶揄された地方大学、徳島・山梨・埼玉の各大学の出身者です。地方創生が叫ばれる中、戦後70年を経て地方大学にも学問研究の成果が表れてきたと解釈すべきでしょう。

▽今月号より(T・N)さんから「善隣」の編集を引き継ぎました。私は中国ウォッチャーではありませので、中国関連の情報についての知識は新聞報道程度です。詳しい情報については諸先輩に助けていただき、本誌のレベルを維持してゆきたいと考えています。皆様の温かいご支援をお願いいたします。

(福島靖男)

2016年1月の行事予定

- 7日(木) 俳句会(新年会) 13:00
兼題「元日、養」及び当季雑詠
- 12日(火) 新年互礼会 12:00 (於新橋亭新館)
事前に事務局へお申込みください。
- 14日(木) ○公開フォーラム 14:00
「中国空軍建設に協力した日本兵士の物語」
土屋龍司氏(元防衛庁、作家)
- 19日(火) 謡曲会(松木先生稽古日) 14:00
- 20日(水) ○公開東北フォーラム 14:00 満洲シリーズ第4集 第4回
「満洲の朝鮮人移民と稲作農業」
朴敬玉氏(学習院女子大学非常勤講師)
- 21日(木) ◎公開アジア研究懇話会 18:30
「紛争解決論から考える尖閣・竹島・北方4島」
名嘉憲夫氏(東洋英和大学准教授、沖縄出身)
- 25日(月) 書道同好会 14:00
- 26日(火) 謡曲会(松木先生稽古日) 14:00
- 28日(木) ○公開フォーラム 14:00
『挑戦する満洲研究—地域・民族・時間—』出版記念合評会

1月の会議予定

12日(火)	運営委員会	14:00	20日(水)	東北委員会	14:00
14日(木)	講演委員会	15:30	21日(木)	理事会(第10回)	14:00
〃	広報委員会	15:30	27日(水)	国際交流委員会	14:00
18日(月)	環境委員会	14:00			

※会員外一般聴講者の参加費は、◎印:1000円、○印:500円、無印:無料です。

※下線は通常日程に変更あり

【2016年2月の講演予定】

- 5日(金) ○公開フォーラム 14:00
「葫蘆島引揚げ政策の決定過程—中華民国と米国務省往復電報の分析」
矢吹晋氏(横浜市立大学名誉教授、当会理事)
- 17日(水) ○公開東北フォーラム 14:00 満洲シリーズ第4集 第5回
「海を渡った日本の筏—戦前鴨緑江における日本式筏の導入過程について」
永井リサ氏(大連大学日本言語文化学院講師、九大総合研究博物館専門研究員)
- 18日(木) ◎公開アジア研究懇話会 18:30
「台湾の総統選挙」(仮題)
迫田勝敏氏(東京新聞在台北特別通信員)
- 25日(木) ○公開フォーラム 14:00
「葫蘆島からの引揚げ」(仮題)
米濱泰英氏(オーラルヒストリー企画)

これからの満洲研究とは――

挑戦する 満洲研究

―地域・民族・時間―

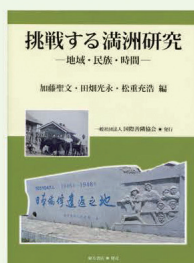
加藤聖文・田畑光永・松重充浩編

A5判二六四頁

二四〇〇円＋税 978-4-497-21517-9

一般社団法人国際善隣協会発行

東方書店発売



国際善隣協会の定例講演会において二〇一二年から二〇一五年にかけて行われた若手研究者二三人による満洲研究の現状報告をまとめたもの。
あの戦争の時代を直接知る世代が少なくなっていくなかで、実体験のないわれわれは「満洲」にどう向き合っていくのか。新しい挑戦への足がかりとなる一冊。

目次

第一部 研究の視点

「世界史」から満洲史を考える――「二〇世紀満洲」の射程に関する覚書（松重充浩）
歴史としての満洲体験――記憶から記録へ（加藤聖文）
満洲の歴史継承性から見た二〇世紀満洲（塚瀬進）
満洲研究の視座――記録と記憶をめぐって（菅野智博）

第二部 満洲国時代の検証

満洲国の「国民」とは誰だったのか――国籍と戸籍から考える満洲国と日本人（遠藤正敬）
満洲電信電話株式会社とは何だったのか（白戸健一郎）
地域から送り出された満洲移民（細谷亨）
二〇世紀前半の満洲における水稻作試験と品種の普及について（湯川真樹江）
新中国から祖国へ――日本人留用者と日本人戦犯の帰還（大澤武司）
日中関係史のなかの大連――対立と友好のジレンマ（佐藤量）

第三部 周辺と満洲

日本人が出会った内モンゴル（鈴木仁麗）
外モンゴルからみた満洲（一九二〇年代）（青木雅浩）
ロシアと満洲をつないだ中東鉄道の歴史――一八九六～一九三五年（麻田雅文）
満洲関係略年表（一九四五年まで）

東方書店

ホームページ〈中国・本の情報館〉<http://www.toho-shoten.co.jp/>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-3 / 営業電話 03-3937-0300 / FAX.03-3937-0955